

フランス革命とイングランド——一七九一年暴動

——資料的考察——

永井義雄

はじめに

一九八九年は、フランス革命開始二百年記念の年であり、フランスを初め世界各地で各種の学会や行事が行われた。しかし、フランス革命は、一七八九年に始まったばかりで、その年に終わったのではなかった。

海峡をへだてたイギリスで一七九一年に、「ブリーストリ暴動」とも「パーミンガム暴動」とも呼ばれる暴動が起きたことは、杉山忠平『理性と革命の時代に生きて』(D)に描かれている通りである。この暴動は、フランス革命の進行に対してイギリス保守派が抱いた危機感により起こされたものである。

しかし、他方では、次のような一文が見られる。

「一七九一年の、フランス革命の二周年にあたって、「月の会」の会員たちは、そのお祝いの会をひらきました。このとき、王さまや、坊さんたちの勢力にそのかさされたおろかな群集が、このお祝いの会場をおそって、火をはなち、つづいて、ウォットや、プリーストリをおそいました。プリーストリは、自分の教会をこわされ、自分の家も焼かれて、たいせつな実験の道具も、ノートも、すっかり失ってしまいました。プリーストリは、身をもって、難のがれ、アメリカにわたり、十年ばかりのち、一八〇四年に、アメリカで死にました。

おろかもおのたちにおそわれたとき、プリーストリとともにいあわせた、マルタという女の人が、このときのプリーストリのことを、こう書いています。『プリーストリは、たいせつな実験の道具をこわされる音を、屈するいろもなく聞いていました。あわてたり、いらいらしたことは一言もださず、すこしも、不平や、苦痛のかおつきを見せませんでした。泣きがお一つせず、ため息一つもらしませんでした。——どんな人でも、これほどの試練の中に、彼ほど神々しく見えたことはないだろうとおもいます』(三宅泰雄『空気の発見』(D) 6)。

三宅泰雄はこの書物の「あとがき」で次のように書いています。「私は、科学教育が科学史とむすびついてなされることを、かねがね主張している。科学的精神をふきこむといっても、科学を創造した人々の思想や生活に、ふれずして、とうていその真髄を理解することはできないであろう。」残念ながら、「科学的精神」を言う三宅の文章には、事実の確認を怠った点が若干ある。右の長い引用文を簡単に順次検討しよう。

一七九一年七月十四日がフランス革命二周年であって、この日、パーミンガムでそれを祝賀する会が開かれたのは事実であるが、それを主催したのは「月の会」の会員たちではなかった。The Lunar societyのメンバーが若干参加していたのは確かであるが、メンバーだけで会を開いたわけではない。[(B) (3) 1:113]

また、「王さまや、坊さんたちの勢力にそのさされた」とあるが、国王が、プリーストリの被害を喜こんだ文献的

証拠は後に触れる通りであるが、この暴動の教唆煽動にかかわった形跡は実はない。これはおそらく、暴徒たちが叫んだ（Church and King for ever 「国教会を守れ」）というスローガンの誤解によるものであろう。そうして、「坊さんたち」の陰謀については、情況証拠はかなり濃厚ではあるけれども、決定的な証拠はない。続いて、「そのかされたおろかな群集が、このお祝いの会場をおそって」とあるのも正確ではない。祝賀会は、不穏な空気を察知して早目に切上げ、とりあえず平穩なうちに解散している。右の文は、祝賀会の進行中を襲われたようにもとれる。確かに進行中に、若干の投石があったという記述もあるが、それが事実としてもそれは暴動の前触れではあっても、暴動そのものの開始ではなかった。

そして、ウォットが暴徒に襲われたという事実はない。ウォットの息子は、プリーストリの思想を継承したラディカルではあったが「Eric Robinson (B) (3) 2: 17; Thomas Cooper (B) (3) 1: 44」、蒸気機関の改良者にして商品化に成功した父親は必ずしもそうではなく、難を逃れている。プリーストリの家は確かに襲撃を受けたし、暴徒の襲来以前にかれが「身をもって、難をのがれ」たのも事実である。しかし、その時、「プリーストリとともにいあわせた、マルタという女の人」というのは、ラッセルの娘マーサ (Martha Russell) のことであろう [(A) 20, 21; (B) (3) 1: 110]。

本稿は、三宅泰雄の記述を正確なものにすることを直接の目的とはしない。すでに杉山忠平の記述があるから、事実経過についてはそれにゆだねたい。本稿が目的とするのは、この暴動に関する文献目録の作成と文献のサーヴェイである。しかしこの暴動に関する資料はあまりに多く、事実の記述だけでもつき合わせるのになお多くの時日を必要とする。とりわけ、暴動の諸事実を宗教的、政治的文脈の中だけでなく、経済的文脈の中でも検討するのがここの十五年程の研究動向でもあれば、全面的な事実の掌握にはかなりの時間を必要とする。そして更に、その思想的波紋の全

貌解明にもまた、相当な日数を要する。とりあえず、この暴動二百周年の本年にわたくしに可能なことは、目下のところ最も詳細な文献目録（もとより完全なものからは遠い）とともに、わたくしが知り得た思想的波紋のいくつかの断片を資料集として、しかもそれも未定稿として提供することだけである。

文献目録は原則として初版のみ掲げ、以下の文中での引用のさいには文献目録の種別と番号で書名に代えられる場合にはそうした。

一、研究史について

(1) ローズをめぐる

ブリストリ暴動の研究は途絶えていない。そのうち、これまで最も精力的にこれを研究対象としたのは、ローズ (R. B. Rose) であり、ローズの研究期間は主として一九六〇年代であった [R. B. Rose (B) (3) 1: 130; (B) (3) 2: 20]。かれが『われらの文献のはか Victoria County History of Warwickshire, Vol. VII (1964)』に書いたのは、次のとおりである。The City of Birmingham, Political and administrative history; Political history to 1832 (pp. 270-297): Religious history; Protestant nonconformity (pp. 411-482), other religious bodies (pp. 483-485)。ローズは、(B) (3), 2: 20』において、VCH のために書いたものだけでも刊行が遅れるようだから独立に公表すると述べている。確かにそれから四年も経たなければ VCH, Vol. VI は出なかったから、かれの判断はおかしくない。

しかし、ローズのその論文には、疑問なしとせず、その疑問は四年後の VCH, Vol. VI の論文でも解消しなかった。

例えばローズは、治安判事たちが暴徒たちに示した共感は、おそらく「表面的に過ぎず、戦術的なもの」(B) (3) 2: 20, p. 81]であったと言う。それを立証するのは、治安判事カールスとスペンサーとがライランド家を襲っていた暴徒たちに思い止まらせようと説得を試みていたことであり、それには目撃証人が複数いると、ローズは言う。

この点について、M・スミス (C) 2] の学位論文は、大要次のように批判する。治安判事が充分に騒動が荒れ狂った後に阻止しようとしたことはあったかもしれないが、重要なのは初期の対応である。「もしカールスとスペンサーとがこの初期の時点で「戦術的」に行動していたとしたら、こうした戦術は何のためにとられ、誰の役にたったろうか。」また、どうしてかれら治安判事は事件発生の七月十四日に打ちくつろいで上気嫌でおれたのか。ラッセルとかハンフリズという指導的非国教徒が保護を求めに来たのにどうしてかれらは無礼かつ非協力的であったのか。M・スミスはこう述べて、「カールスとスペンサーとが暴徒に与えた叱咤激励は本物であって、決して「戦術的」でも「外見だけ」でもなかった」と断言する。ローズは、通説とは異なる新説を提出したのかもしれないが、所詮、この点の強引な論述は多くの証拠に耐え得るものではない。

しかし、ローズ論文の影響力はかなり大きく、例えば Albert Goodwin (B) (3) 1: 60, pp. 180-3] はほぼローズを踏襲している。John Money (B) (3) 1: 95, pp. 223-9, pp. 276-82] も、事件の経過については全くローズにゆだねてしまっているが、ここではウエスト・ミッドランツ全体が視野に入れられていて、パーミンガム暴動はとりたてて論議の対象になってはいない。

なお、ローズに対して「宗教的、政治的要因を(思うにあまりに)極少にし、一定の社会的、経済的データを強調している」という批判を投じたのが、ブラック (Eugene Charlton Black, (B) (3) 1: 26, p. 234 f. n. 2] である。

この批判は、M・スミスにも妥当するであろう。問題は、バーミンガムにおける経済成長に伴う階層秩序の再編とそれが政治的、宗教的対立関係に与えた影響を解明することであろう。

(2) 最近の論文

最も最近の研究はアーサー・シェプス (Arthur Sheps, (B) (3) 2: 21] であるが、ここには暴動の原因、経過について新しい発言はないと言っている。しかし、この研究は、当時の政治的風刺画に画かれたプリーストリとプリーストリ暴動を紹介した点に新味があった。プリーストリを風刺した政治的絵画がこれまで知られていなかったわけではないが、一連の戯画を示すことによって、「プリーストリは際立って大衆の敵と描かれた」ことを立証した。マスコミの世界におけるプリーストリと非国教徒たちの多くがこのような思想的攻撃の対象となったことは、つとに論じられてはいたが、このように視覚的に立証されたのはこれが最初であろう。もっとも、マスコミはこれだけではない。風刺画による人身攻撃を潔しとしないラディカルズの陣営は、それよりむしろ思想の闘いを挑んでいたはずである。シェプスの関心は、絵画的表現に限られているから、それだけ一定の偏りを有していたと言わねばならない。シェプスは、そのことに気づいていない。かれは、絵画的表現の特徴をただちに一般化する前に、文章的表现の世界と対照すべきであった。

(3) M・スミスの学位論文

ローズを批判しつつ新しく事実を確定しながらバーミンガムにおける階層構造の変化と関連づけて、一七九一年のプリーストリ暴動と一七九五―六年の食料暴動とを分析したのが、M・スミスの学位論文 [Martin Smith, (C) 2]

であった。宗教史、政治史、思想的分析よりも経済史的視角がまざる点において、ローズとM・スミスとは共通している。しかし、M・スミスは、バーミンガムの中産階級の台頭がいかに政治的、思想的状況を変えたかという興味深い論点を追求している。

二、事件の経過に関して

(1) ラングフォードの論述

John Alfred Langford [(B) (3) 1: 81] はさまざまな文献からの抜粋を主にし編者のコメントと所見を述べたバーミンガム史で、一七九一年暴動については、次の文献資料が用いられている。(1) Smith, William Hawkes [(B) (3) 1: 118], (2) Hill, M. D., Address at Midland Institute, 30th September 1867, (3) The [Aris' Birmingham] Gazette [(B) (1) 1], July 11, 1791, (4) The Birmingham and Stafford Chronicle [(B) (1) 2], Thursday, the 14th July, 1791, (5) Morfit, John [(B) (2) 50] ——主なものを紹介しておく。

William Hawkes Smithによつて編者 J. A. Langford は、暴動の四日間を詳細に伝える。しかし、以下はラングフォードの所見である。バークが引金になったかのような叙述であることに注意。「バークの激情に刺激された政府はフランスの原理と言われるものがイングランドに広まるのを防ぐために、徹底して威圧と迫害を加える用意をしていた。そして民衆のほとんどが一致した意見は政府側にあった。偏見に固まり恐怖した当局は恐怖におののく無知と

野蛮の側にあった。」(Ibid., Vol. I, p. 433.) ——)と William Hawkes Smith が再び引用される。大要次のようである。富裕な階級は、自衛のために下層階級に教育を与える必要を自覚しなかった。慈愛家レイク氏の日曜学校の試みは十年にしかならず、労働階級は偏見とデマを受け入れやすかった。

このあと、プリーストリが一七八〇年以來十一年間をどのようにパーミンガムで過して来たかは、杉山の叙述よりやや詳しいけれどもつけ加える意味はあまりない細い事実なので省略する。

Matthew Davenport Hill (1792-1872) がその父から聞かされた体験談を語ったのは、別にその弟の話と合わせて後に提出したい。ヒル家の兄弟たち(その三男がペニー切手のサー・ロランド・ヒルである)の父 Thomas Wright Hill (1763-1851) がプリーストリ邸の防衛にかけた話を息子たちにしたことについては、すでにわたしは書いたことがある(永井義雄「イギリス急進主義の教育理論と実践」、宮本・大江・永井編『市民社会の思想』御茶の水書房、一九八三年所収、三〇一ページ)。ただ、マシューの話のごく概略を摘記すれば次のようである。パーミンガム暴動の際の夕食会は「誤まった一歩」であったが、今日の善良な市民はその時のような無知につけ込んだ煽動にむしろ反抗するだろう。あの時はプリーストリが被害を受けたことを、ジョージ三世が喜んだが、もし国王が科学を愛する正しい人間であったなら、プリーストリがそんなことをするはずがないと分ったはずである。プリーストリはわたしの父に「迫害を受けるのはキリスト教牧師の義務なのだ」と言った。ここで触れられたジョージ三世のことも、マシューの話でここに収録されていない他の話も、後にもう少し詳しく書きたい。(4)ヒル家の記述参照)

このあと、新聞に夕食会の広告が載った(七月十一日)ことを初めとして、ピラとそのピラの作者、印刷者、出版社、配布者の発見者に一〇〇ギニーの懸賞金が出たことなどは杉山の叙述に基本的に書かれてある。ただラングフォードはこの懸賞金を出すと声明した人を特定していないし、ラングフォード以外にもそれを特定した者はいないが、

ガーベットはシュルバイン伯宛の書簡(Mary 21, 1791)の中で、自分たちが懸賞金をかけたと述べている。(A5)

七月二十五日になって、*Gazette* に初めて暴動の記事が出る。編者ラングフォードは、これが事件の「最良の説明」だとする。これも、基本は杉山の叙述にゆだねたいが、若干のエピソードを真偽は確かめ難いままに杉山と対照させながら採録しておく。Old Meeting House は New Meeting House よりやや遅く別の一隊に襲われたのだが、ここではリーダーが建物への放火を制止したけれども制止がきかなかつた (*bid. p. 481*) と述べられている。プリーストリの家では、一人の男が落石で命を失ったこと、若干の書物が運び出されて助かったことが記されている。これらの書物がプリーストリの手に返ったとまでは書かれていない。どうなったであろうか。

第二日(七月十五日、金曜)、午前、エイルズフォード伯がプリーストリ邸に残っている連中に帰宅を説得したし、同じころ、治安判事のモランド氏も別の一隊に帰宅を説得したが無駄だったと言う。杉山の言う「国教会の名望家たちのなかにかれらをなだめ、これ以上の乱暴を阻止しようと試みるものがいたが、無益であった」(D) 1, p. 17」というのに相当しているであろう。午後二時ごろ、John Taylor と John Ryland とのそれぞれの家が襲われたことも、叙述の順は違うが杉山の叙述の通りである。しかし、ライランド邸の暴徒中、入院するほどに泥酔した者が三名おり、七人の女性の遺体が廃墟から掘り出された話は杉山にない。テイラー邸にかけつけた臨時警官の指揮者は、キャプテン・カーヴァー (Captain Carver) と書かれている。カーヴァーは一〇〇ギニーで放火をとどめようとしたけれども、買収なんかされんぞという大声にたじろぎ、辛うじて脱出した。そしてその夜、ハイ・ストリートの William Hutton 邸も襲われたが、ここを襲ったのは主として少年と売春婦であったと述べられている。そして、ある女が放火しようとするのを別の女が制止してなぐり倒したとも言う。

十六日(土曜)は、ハトンのカントリ・ハウスが焼け、スパークブルックの George Humphry 邸が略奪されたこ

とは杉山と一致する。しかし、杉山が書いた四〇〇〇ギニー（ついで八〇〇〇ギニー）の供与の提案のことは、むしろこちらには記述がない。William Russell と Thomas Hawkes とのそれぞれの家も、杉山と同じ順に語られているが、ラッセル邸について杉山は明確に襲撃の性格を書いていないけれども、ここでは放火と明確に語られている。ついでに言えば、ホークス邸の所在地は、杉山がモウスリ・ウェイク (Moseley Wake) としているのに、ここでは Moseley Wake Green と書かれている。John Harwood 邸も John Hobson 邸も似たような叙述だが、ホブスン邸の所在地は、ここでは Moseley Road となっている。

このあとの叙述は、杉山とたいして違わない。ただ、William Withering 宅に十七日の日曜に暴徒の襲来があったことを杉山は書いているが、それが午後であること、また前日にも一隊が来たが酒をふるまわれて帰ったことが、ここには語られている。

二〇日（水曜）に援軍が来るが、杉山は騎兵三個中隊と略記している。ここでは、3 troops of the 11th Regiment of Light Dragons となっている。つまり軽騎兵第十一連隊の三個中隊であろう。こういうこまかい違いはまだまだかなりあるが、新書という小型本の形式の中に要領よく適確に事態の推移を述べた杉山の叙述は美事である。

この記事は最後に、劇場が閉まったままであったが、本日（七月二十五日）開く旨を告げて終っている。（以上、*Ibid.*, pp. 481-486.）

ラングフォードは、この記事のあと、八月中旬までの暴動の余波を述べる。このなかで注目されるのは、地方当局者たちが軍に対する感謝を決議し（八月八日）、国王その他もろもろの鎮圧の功労者に感謝決議（人によっては賞金をそえている。八月十二日）をしていることである。こうしたことから、ラングフォードは、暴動がブリーストリの言うように高教会派の仕業に違いないと言う。この所見は正確ではない。杉山の叙述が正確である。「ブリーストリ

はむしろ政府に、そして体制の不可分の要素としての国教会、したがってまた現地の聖職者に事件の責を帰している。」〔(D) 1, p. 33〕その感謝決議の中で治安判事として感謝の対象となったのは、Joseph Carles と Rev. Dr. Spencer の二人であって、臨時警官を募って鎮圧に努力したカーヴァーの名は挙っていない。感謝された二人はかなり組織的に活動したらしい (*Ibid.*, pp. 485-6)。

こうして、ブリーストリの悲劇を謳ったモーフィットの詩がいくつか紹介され、群集が煽動されたことが描かれた後、裁判に触れられる。これが裁判と言えらばという皮肉を加えながら、ラングフォードは次のような例を挙げている。起訴されて無罪となったジョージフ・ケアレスの場合は、ジョン・ライランドの家を襲った一人で、家を壊して豚を連れ去った略奪を問われたのであるが、かれの義妹は、それは略奪ではなく豚を火から逃したのだと証言し、無罪となった (*Ibid.*, p. 496)。

このあとのラングフォードの叙述中、多少とも思想的観点から注目しておくに価するのは、再び、M・D・ヒルの言葉の引用であって、ヒルは、この時のパー博士の勇気ある発言を讃えると同時に、クロフト博士が断固非国教徒をこの際葬るのだと息まっていたことを非難を込めて述べている (*Ibid.*, pp. 498-9)。

ラングフォードの一七九一年暴動の叙述は、損害補償額 (三五、〇九五ポンド一三シリング六ペンス)、訴訟費用 (一三三、〇〇〇ポンド) の記述で終わっている。

杉山も指摘するように現場で書かれた資料は臨場感はあるけれども一面性も免れ難いゆえ、「史料批判」が必要であるが、その意味での検討は本資料集での課題ではなく、生のまま提出しておく。

以上でラングフォードの紹介は終わるが、途中で触れられたジョージ三世の件は次の手紙に由来するものであろう。ジョージ三世は、パーミングム暴動でブリーストリ宅で襲われたことを聞いて、ダンダス宛に次のように書いた。

「ブリストリが自分とその一派の浸透させた理論のために被害者となったことを、嬉しく思わざるを得ない。民衆はかれらを正しく見抜いているのだ。けれども、民衆が不満を示すのにかかる狂暴な手段に訴えたことを是認はしかなる。……既に下されたパーミンガムへの軍隊の出動命令を強化する措置の提案を、朕は裁下する。」(King to Dundas, July 16, 1791, in A. Aspinall (ed.), *Later Correspondence of George III, 1783-1810*, vol. 1, 1783-1793, Cambridge 1962.)

(2) ウィリアム・ハトンの被害記録

被害者の一人 William Hutton (B) (2) 46 or 47] が目撃証言を残したことは周知である。大要を記しておく。ハトンの書物の初版は一七八一年と印刷されているけれども、一九七六年のリプリントに付けられた「出版社の覚書」によれば実際には一七八二年の刊行であった。従って目撃証言は初版にはもちろんなく、第三版に現われる。第三版は一七九三年に出た(若干の補遺を付けたこれの再刷が一七九五年に新しい日付で出ている。わたくしが使用するのはこの一七九五年版である)。

一七九五年第三版(再刷)の「補遺」(p. 467)でハトンはこう述べている。「『パーミンガム史』第三版が印刷所において、およそ半分程が印刷された運命的な一七九一年七月十四日、わたくしは、自分の国の法律で守ってもらえずに血祭りに挙げられ、わたくしがどんな誤ちを犯したか、告げられないままであった。印刷所に持って行って改訂本は失われ、わたくしは書くことも訂正することも全く不可能となった。——三年以上が経過したので、歴史の欠落を防ぐためにこの間の出来事を記録しておく必要がある。」

本文に戻ると、ハトンは暴動の三大原因を数える。低賃金、政治的あるいは宗教的見解の相違、食糧価格の騰貴で

ある (*Ibid.*, p. 385)。これらの点を押しつめて行けば、二十世紀的議論に発展したかもしれない。しかし、第三版 (p. 389-392) は「一七九一年の暴動」という文章を収めているので、この部分を紹介しよう。最初に「序」がある。次のような書き出しで始まる。「一冊の本に同じ著者の書いた序が二つあるのは異常である。しかもそれらは相互に矛盾するが、それでも両者とも正しいのである。わたくしは、前の序でも本文でも民衆の誇っていい勤勉、礼儀、平和的気質を賞讃した。すべて事実根ざしていた。しかし今われわれは、頑迷、放縦(じょう)、無秩序、侮辱、強奪、放火そして殺人を始めている。このこともまた事実であるのをわたくしは極めて遺憾に思う。」

このあと、暴動の描写に入るが、最初に性格づけがなされる。「これら不幸な暴動は……あらゆる文明国民において神聖とされている私的所有に対する恥ずべき攻撃として、全ヨーロッパを震撼させた。それは人類にとって恥でありその地の大きな汚名である。」こう述べて、前に暴動の三大原因として列挙していた事項と合わせて考えると、杉山の言う「ともかくも労働運動——どれほど前近代的・反近代的であれ——としての要素」(*Op. cit.*, p. 37) をハトムも嗅ぎ取っていたであろうか。このあと、事件の叙述に入る。「およそ八十一人」が「ザ・ホテル」に集まった (*Langford, Op. cit.*, p. 481. が伝え *Gazette* の記事は「約八〇人」、杉山は「参会者八一人」(*Ibid.*, p. 11.))。叙述は簡単で、一団の群集が次つぎに襲って放火したかのように読めるが、もちろん、そうではない。十四日の標的と順序はどの叙述とも一致するが、十五日の記述は「ジョン・ライランド邸の炎上で始まった」とあるが、これは杉山、Langford と一致しない。そしてこの日にハトム自身が襲われた。「一団の暴徒がジョン・テイラーの優美で高価な邸宅ボーズリ・ホールを燃やしている間に、他の一団がわたくしの家、事業上の資財、書物と家具を破壊した。」

翌十六日(土)は、ハトムの別宅の襲撃が始まった。「二マイル離れたソールトリのわたくしのもう一つの家と家具に放火することで始まった」(杉山は「三マイルにあるウォッシュ・ウッド・モースのハトム家別宅」(*Op. cit.*, p.

19)と書く)。ハンフリーズ邸に続くラッセル邸は、「火災に包まれて終った」(この点 Langford, *Ibid.*, p. 483. と一致)。杉山は、Thomas Russell, John Coates の被害が発生した日については曖昧であるが、ハトンは、カーハンプトン夫人宅(放火)、J・ハーウッド邸(放火)、J・ホブスン邸(放火)と同じく十六日のこととする。ただし、放火を免れたことは杉山と同じ指摘である。杉山の書いた「ハリ・ハント」は名前が出て来ない。

十七日の記述は基本的に同じであるが、杉山が十九日(火)のこととするマイル邸襲撃は、ハトンでは十七日になっている。このあと被害額が六万ポンド以上であったことが述べられて記述は終るが、ここに注がある。注は補償額に触れてから(Langford, p. 499. と同じ)、「ニュー・ミーティング」・ハウス」の理事たちは認可を失ったため、訴訟を提起出来なかった。そのため国王の優渥なる思し召しによりラッセル氏からピット氏への申し出に対して二千ポンドを国庫から下賜された。」これに反して「The Old Meeting House は訴訟で一、三九〇ポンド七シリング五ペンスの補償を得た。そしてそれは後に(一七九五年)旧跡地に再建されたことはC. H. Beale [(B) (3) 1: 22] が述べるところであるが、ビールに記されていないのは、この注によると、再建の費用が五、〇〇〇ポンドであったというところである(W. Hutton, *Op. cit.*, p. 471.)」。

(3) サミュエル・ロシリの調査

ケンサムの弟子の一人で、弁護士でも国会議員でもあったサミュエル・ロシリ(Sir Samuel Romilly, 1757-1818)は、その『自伝』[(B) (3) 1: 105]に付された書簡集の中で、パーミンガム暴動に触れている。これに触れた書簡は二つである。

第一(Letter LXXXI, to Madame G., August 2, 1791, *ibid.*, pp. 431-2.)の要旨は以下の通りである。

大変奇妙なことに標的になった人びとはみな、仁愛で有名であり、勤勉でパーミンガムの繁栄に貢献して来た人たちです。暴徒たちはこの国の政治的、宗教的組織を転覆しようとしていると欺かれ、信じたのです。推測で言うのではありません。わたくしは暴動の原因と事情を調べにパーミンガムに行つて来ました。わたくしは礼拝堂や家の破壊に最も破壊的だった人が一番犯罪的とは思いません。フランス革命の祝賀ということは暴動中忘れられてしまい、被害者の中には夕食会に出なかつた人もいます。暴徒が叫んでいたのは「国教会万歳、長老派をやっつけろ」です。プリーストリその他の手紙が夕食会の説明をしていますので同封します。(要旨)

宛名のG夫人とは誰か、今のところわたくしには判っていない。発信地はGray's Innである。

第二の手紙 (Letter LXXXV, October, 1791, *ibid.*, pp. 443-450) は宛先不明、発信地も不明だが、長文のものである。やはり要旨を書く。

裁判について知らせてくれとのことでしたので書きます。暴動の本当の煽動者については、残念ながら一切不明です。被告は全部、下層階級です。十二人起訴され、四人有罪です。しかし有罪の一人が釈放されたのは、礼拝所を焼いたけれども礼拝所がきちんと登記されていなかったという理由です。もう一人も有罪で釈放されましたが、かれは若かつたから証人喚問がなかったという理由です。無罪のうち六人の有罪の証拠は明白でしたが、釈放です。その六人中、ライスとウィットブレッドとの二人は首謀者格で、かつてウースターで二度訴追され、二度とも釈放になった経歴を持っています。証拠は明白なのです。かれらが罪を問われれば、かれらを雇つた人も分つたでしょう。それですから、国教会の友と称する人たちはかれらの釈放を待望していたのです。いえ、全員の釈放を望み、寄付を募つてあらゆる法的救助をしようと思いました。一人につき二人の法廷弁護士、一人の事務弁護士がつけられ、自分で弁護士を持つる者には三人の法廷弁護士がつけました。

しかし法廷弁護士の助力といっても、次のものに比べたならたいした助けではありませんでした。「主任検事のひどい詭弁、判事のおそろしい無能力、そして陪審の腐り切った依怙えこひいき臆おそ貞ひん」です。検事の起訴状は、被告らが同情の対象となるということから始めました。かれらは、欺あざむかれて行動し一種の狂気に落ちていたし、間違っまちがってはいたが真面目だったと言うのです。何度も強盗などで裁判を受けた連中なのに、です。政府は真面目に起訴していないと誰もが考えています。茶番なのです。

判事は最低で、法律を全く知らず、釈放するようにとしか陪審に説明出来ません。

ブリーストリの家を焼いた二人が有罪になりましたが、それは、他の無罪放免組より証拠がしっかりしていたわけでは決してなく、ただ無罪にすると自分も陪審もスキャンダルの的になると、もう一人の検事コーク氏が言ったからです。陪審はバーミンガムの財産家たちばかりで、偽証と知りつつコーク氏に同調しています。そのうちの一人がわたしの友人にそう語っています。パーク氏の騎士道精神はまだ死に絶えていません。バーミンガムの高貴な人々(noblesse)にそれが支配的である限り、国民議会の理論が不評なのは当然です。ウォリックシャーの反非国教徒感情はそこにいない人には分かりません。非国教徒一般に対してではなく、バーミンガムの非国教徒に対する反感なのです。

被害者たちは法廷に顔を出しません。そうするのが慎しみだと考えているからです。原告側弁論は大蔵省法務官が行っています。非国教徒側は、全暴動参加者の死刑、バーミンガムの半分の人口の死刑を望んでいるという噂もあります。最近、非国教徒はウォリックに日曜学校を作りました。そこに、慈善心から国教会の貧民の子を入れま

した。それを問題視した国教会側は、ダニエル師を議長にして集会を開き、国教会の権利の侵害と決議しました。要するに、今ウォリックシャーにみなぎる反非国教徒感情は有名なカソリック陰謀の時の反カソリック感情に似ています。ある紳士によると、信頼すべき筋の話として、革命祝賀夕食会の翌日、手提籠がホテルに持ち込まれ、開けてみると短刀がつまっていたそうです。暴動の時の叫び声は、「哲学者はいらない——国教会万歳」です。何人もの人が「哲学者は無用」と家に書かれています。有罪になった者のうち一人はすぐに許されました。これはパーミンガムの人たちの驚きでした。札つきの男なのです。

パー博士はパーミンガムではプリーストリ博士と同様、不評です。パーミンガムで最近、プリーストリの名を挙げて褒めたからです。しかし、もっと大きい理由は、国教会上層部と衝突したことでしょう。しかし、かれが非国教徒の裁判にかかわったことは事実ですし、かれ自身が寛容でない高教会派でありながら寛容でない高教会群集の敵意的になるのですからおかしなものです。(要旨)

同一の手紙の中に繰返しがあつたり、暴徒の叫びが最初と二回目で違っていたりするけれども、さすが法律の専門家の目で行われた調査だという感じがする文章である。「有名なカソリック陰謀」とは、一七八〇年のゴードン暴動のことである。

なお、ロミリが触れているパー博士については、別に論じる。

(4) ヒル家の記述

「一七九一年パーミンガム暴動が起きた時、最初主に非国教徒が狙われたので、わたしの父とクラスメートたちはプリーストリ博士の家の防衛を申し出た。しかし博士は自衛のためにさえ物理的力を使っているのはよくないと考え、か

これらの申し出を断わった。……しかし断わられたにもかかわらず、父と少数の勇敢な友人たちは博士の財産を守るために出来るだけのことをしようと決意した。」〔Frederic Hill, (B) (3) 1: 65, p. 9.〕そうしてここで、F・ヒルは兄マシューの文章を引いて、かれらの父の当夜の動きを伝えている。

「わたしの父は扉を閉ざし、シャッターを降して予想される暴徒に対して出来るだけ家を大丈夫にしてかれらの方を待ちました。父はよくわたしに、暗い部屋の中を往き来し、友達たちと行き所のない状態でいら立っていたことを話してくれたものです。父は群集が乱入した時に居合わせ、掠奪と破壊とを自撃し、放火により激昂が頂点に達するのを見ていました。家の近くを歩いていると、職人がエプロンに靴をつめて逃げるのが見えました。わたしの父はあとを追っかけ、盗人が一人になるとその首筋を掴み、刑務所に引き立てました。しかしそこで父は無念にも、男がこっそりと釈放され立ち去るままにされるのを見ていなければなりません。看守は父に、当夜は囚人を入れてはいけないと命じられていると言ったのです。」

フレデリックは引続き、父の話が続ける。父はひるむことなく、怒り狂う暴徒たちに向って話そうとして街灯柱に登ったが、石が一斉に投げられたため止むなく断念した。こういう殺伐たる雰囲気の中にも、愉快なエピソードがあった。プリーストリーは音楽が好きで、気晴らしによく小さな手回し風琴パレオルガンを回した。暴徒の一団はこの手回し風琴を庭に出して、あとで別のものと一緒に持ち帰るつもりで置いていた。そのうち暴徒の一人がハンドルを回してみると、みんなの驚いたことに、鳴り出したメロディーは“God save the King”（国王万歳）であった。

このあと再びマシューからの引用になる。治安判事により臨時警官が募集されると、かれの父はこの中に入り、「暴徒に攻撃されていたパスカヴィル・ハウスの防衛に同僚たちと向った。」一旦は群集を押し戻したが、結局、敗れた。重傷者も何人か出、一人が怪我がもとで死んだ。「わたしの父は、打撃を受けた時を覚えていないが翌朝腕が上

らなかった。父は、旗かそんな目印があってその囲りに隊伍が組めれば、その日の運命は逆であつたらうと言うのが口ぐせであった。」バスカヴィル・ハウスは焼け落ちた。フレデリックによると、それは長く「バーミンガムの恥」として残っていた。

次は、プリーストリの「秘書」からのT・W・ヒル宛の手紙で、フレデリックたちが所有していた。「……プリーストリ博士のもとめにより、博士の『教会史』と『初期の見解』一セットをお送りします。最近の暴動中のヒル氏の努力と配慮とに対する感謝のしるしとして受取って下さるよう博士は願っておられます。ここにお送りする本のほか追加をお送りしたいと思いますが、不本意ながら遅れることになりました。／デイグベス、金曜、一七九二年一月十三日」。

フレデリックはなお、祖母（父の母）と伯母（父の姉）とからの父宛の手紙を載せているが、割愛しよう。ただ、フレデリックたちの母が結婚前の暴動のさ中に体験したことだけ書いておこう。かの女は、アンダートン家の養育係をしていた。暴動中のある日、かの女は子供たちを無蓋馬車に載せて走っていたら、暴徒の一団に止められ、「国教会方歳！」と宣^よえるよう強要された。かの女は強固な自由主義者であつたから、拒否すると、何人かが脅そうとした。しかし指導的な一人が怒鳴った、「行かせろ！ 若いのに気の強い女だ。」暴動のあと、かの女は、トマス・ライト・ヒルと結婚したのであつた (Frederic Hill, pp. 9-18)。

なお、T・W・ヒルのプリーストリア家防衛のことは、Maddison, R. E. W., and Fransis R. (B) (3) 2: 12, p. 101.] にも見える。

(5) 祝賀会場の名称について

当日の祝賀会会場となったホテルの名前は、多くの文献が単に「the Hotel」としか書いていないが、杉山 (D) (1), p. 147) は「バーミンガム・ホテル」と書いていて、これが固有名詞であるかのように読めるけれども、こういう呼び名は Garbett (A) 5) の他には見られないし、杉山自身の叙述でも、ホテルへの言及は数ヶ所あるうちのこの名称はこっただけである。当日祝賀会の副議長を勤めた J・ピセット (B) (3) 1: 54, p. 76) は、「ロイヤル・ホテル the Royal Hotel」と書いてあるが、フランス革命の勃発を一七九〇年と記述するような記憶力を考ええることにわかには信用し難い。ところが、Albert Goodwin (B) (3) 1: 60, p. 181) は何の典拠もなく「the Royal Hotel」と記している。Dadley's Hotel, Temple Row, Birmingham」と記したものもある。タドリとは所有者の一人である。cf. William Hutton, DNB, q. v.; (A) 1]

なお、ピセットには後にバーミンガムを謳った詩があって、暴動に言及している [(B) (2) 23, p. 18.]。

いたるところ、あちこちに廃墟

暴動と不名誉の悲しい記念

宗教は残骸に涙し、

迷信は恐怖におののき、ひるむ

ミュージズはその光景を嘆き

ヴェールをかける

不幸な物語りは忘却のうちに沈む

この詩の初めのほうで、バーミンガムは、「経済の町」(TRADING TOWN)と呼ばれている (p. 9)。そして、プリ

ーストリアは出づこないが、ハットン (William Hutton, 1723-1815) ウォット (James Watt, 1736-1819) ホウルトン (Matthew Boulton, 1728-1809) の名が見えてくる。

(6) 事件の一つの評価

「王国で最も暴動の多い都市はノティンガムであった」としながらも、プリーストリ暴動が「これら二〇年間(一七九〇—一八一〇年)で最も激しい暴動であった」と言っているのが、Bohstedt, John (B) (3) 1: 29, pp. 205-6) である。ボーステットは、このプリーストリ暴動の中に、イギリス社会の変化の兆候を読んでいる。「……バーミンガムの暴動は秩序破壊、取引と暴力沙汰との過渡的混合であった。バーミンガムにおける一七九一年のプリーストリ暴動はこの二〇年間で最も激しい暴動であった。それは、バーミンガムのブルジョワ・エリート内部の二極分化の固定化から直接に生じた。暴動は、地方当局が見えぬ振りをしていたという意味で「認可」されていたが、群集はその「認可」のわくを越えてしまい、暴動をあまりに危険な武器としたから、二度と党派闘争には使えなくしてしまった。……バーミンガムのいく人かの職人は事業に成功して十分に自立し、その町の二つの製粉工場のうち一つの主要株主となった。要するにバーミンガムの社会関係にも、そしてまたその町の暴動にも凝集と分解との双方の徴候が現われていた」(p. 205)。しかし、ボーステットは、Martin Smith ((C) 2) と同様の視角からイングランドとウェールズとの諸暴動を分析しつつ、バーミンガムについては、一七九五年と一八〇〇年との食糧暴動のほうにより多くのページを割いている。この時のほうが、自発的な蜂起であっただけ社会関係の危機の様相が明瞭だからである。

三、事件後の事件

(1) 杉山は暴動以前にパーミングム図書館の図書選定をめぐる国教徒とユニテリアンとの間に対立があったことをすでに書いているが、それと同じく、日曜学校をめぐるでも対立が伏在していたことを述べてもいる〔(D) 1, p. 178〕。この対立はむしろ暴動のあとで顕在化した。Miller, R. and Laugharne, H. (B) (2) 58〕はこの対立を扱ったものである。この書物はタイトル中にもあるようにウィリアム・フィールドの『パーミングム・ガゼット』に載ったミラー批判に反批判を加えたものである。W・フィールドのミラー批判とは、牧師ミラーが牧師補ラハーンの協力を得て非国教徒の日曜学校を壊そうとしたということであった。ミラーは、その学校に二人の息子を入れたペン(William and Susannah Penn)という両親に退学させようと買収しようとし、それに失敗すると言うことをきかないと親子ともども教区から叩き出すと脅迫したというのである。ミラーは、これに対して、ウィリアムとスザンナとの宣誓供述書を提出した。二人ともミラー師から買収の試みも脅迫もないし、またそうしたことがあったと誰にも話したことがないと、それは述べる。また別の二人の婦人の宣誓供述書(十一月十日)は、帽子と襟かけをあげるから長老派の日曜学校に子供を入れるよう誘われ、ガウンも半分費用を持ってもらって入学させたことを述べている。つまり買収じみたことをしたのはむしろ非国教徒のほうだというわけである。そのほか同じ十一月十日付の四つの宣誓供述書により、パークス夫人なる人物が国教会に出ている人たちを長老派集會に金品を提供して執拗に誘ったことを語って、非国教徒に対して国教会側が「防衛側」(p. 23)であることを印象づけようとしている。暴動が逆であったことを意識しての作であろう。

(2) バーミンガム暴動の後、同様な意図により(ただし、同様な主体によるものかどうかは判然としない)惹起された類似の事件が、他の二つの都市でも起きた。一つは、一七九二年暮から一七九四年にかけてのマンチェスターであるが、規模はバーミンガムより小さく、狙われた人物もT・ウォーカー(Thomas Walker, 1749-1817) ほとんど一人と、新聞 *Manchester Herald* の事務所数ヶ所のみであった。これについては、Frida Knight, *The strange case of Thomas Walker: ten years in the life of a Manchester radical*, London 1957. が詳しい。わたくしはこの事件について、「環境形成論の形成環境」(『ロバート・オウエンと協同組合運動』家の光協会、一九八六年)で簡単に触れたことがある。また、John Bohstedt [(B) (3) 1: 29, pp. 69-83.] も Albert Goodwin [(B) (3) 1: 63, p. 265.] もマンチェスター暴動を扱う。

もう一つは、ケンブリッジであって、この事件に触れた研究書は皆無に近いと言っている。それでは、どうしてこの事件が知られるかと言えば、次の書物がこの事件に言及しているからである。Robert Hall, *An apology for the freedom of the press, and for general liberty. To which are prefixed remarks on Bishop Horsley's sermon, preached on the thirtieth of January Last*, London 1793, pp. 25-26. 「最近イングランドに政治的理由による暴動が三つあった。バーミンガムとマンチェスターとケンブリッジの暴動である。そのいずれも非国教徒と改革論者に向けられたものであった。」そうして、ここに注がついてケンブリッジ暴動についての若干の記述がある。「そのうちの最後のものに関して下院議員の行動は極めて反自由主義的であった。かれは議会にこう述べた。ケンブリッジの暴動は有権者の一人マズグレーヴ氏が煽動的な演説をしたのを聞いた群集が氏に国歌(God save the King)を歌うように求めただけに過ぎないのだ」と。この所見は全く間違っている。幸いわたくしが懇意にしているマズグレーヴ氏は、

煽動的演説を決してしなかったし、要求にも応じなかったものとわたしは信じている。かれに罪があるとすれば、それはかれが祖国を愛し、議会改革に熱心だというに尽きる。氏の性格を高めている誠実さと無私の美德のたとえ一部分でもわが国の大物たちに注入出来れば、この国は幸せであろう。／時間的に最初に登場したクラウン・アンド・アンカーに本部を置く協会 (The Crown and Anchor association) もまた、恣意的権力のやり方を強力に押し進めて他のすべての点での優越を維持しようと決心していたように思われる。王権神授説、国王の聖別、受動的服従と無抵抗、これらのものは、かれらを葉物にたとえろと国民の健康のために処方した毒薬 (hemlock and night-shade) である。……」ここで言う「クラウン・アンド・アンカーに本部を置く協会」とは、J・リーヴズ (John Reeves, 1752?-1829) が一七九二年に創設した「共和主義者と水平派から自由と所有とを守る協会 (Association for preserving liberty and property against republicans and levellers)」のことであって、この協会は、正確には本部は Crown and Anchor Tavern にあった。この協会は、バーミンガム暴動の折にはまだ結成されていなかったけれども、マンチェスター暴動の陰にうごめいていたことは確かなように思われる。R・ホールもケンブリッジの騒ぎの裏にこの協会が存在したらしいことを強く示唆しているのは興味深い。

なお、この協会と酷似した名称の、従って性格も酷似した協会がジョージ・ベスト (George Best) によりほぼ同じ頃に活動している。名称は、リーヴズの協会名中、Preserving を defending に変えただけである。これについては、The British Library の分類番号 [1879 c 4] のビヤがこの協会のほとんど唯一の資料である。

また、R・ホール (Robert Hall, 1764-1831) の右の『出版の自由と自由一般の擁護』は、全集 (B) (3) 1: 61, vol. III, pp. 61-173.] に収められている。更について言えば、タイトル中にあるように、これは、ホーズリ司教批判を附録に収めるが、本文の第二節は「諸協会について」と題されているもの主としてリーヴズの協会を批判した

ものである (pp. 94-104)。ホールはあまり知られていないけれども、この時点ではプライスやブリストリのような穏和な改革論者ではなく、カートライトに近い「徹底改革論者」であった。「……わたしは徹底改革論者に分類される。この非難の根拠は、わたしが一年議会と普通選挙とを提唱していることにある。」〔*Mr. Hall's reply, to the Editor of the Leicester Journal, Feb. 5, 1822, (B) (3) 1: 61, vol. III, p. 188.*〕

R・ホールのこの基本的立場が理解されれば、「一連の悲惨な事件」によって自分の原理は確証を得たと考えて、次のように書いたのもたやすく首肯出来るであろう。「この間ずっと、国内政治の暴力と不正とは海外におけるわが国の不正と歩調をそろえている。自由と真理とは沈黙させられている。容赦ない弾圧体制が支配している。残忍かつ侮蔑的な判決が完璧な道徳家にして徹底した愛国者シユア氏とパーマー氏とに下された。ブリーストリ博士には暴行が加えられ、かれの覚悟のうえのアメリカ移住は、十八世紀の後半の最後に消すことの出来ない不名誉な刻印を押す事件である。」〔*Advertisement to the third edition of An apology for the freedom of the press, ... (B) (3) 1: 61, vol. III, p. 63.*〕

更に蛇足。R・ホールの『出版の自由……の擁護』は、R・レイ (Richard Hey, 1745-1835) に対する批判を含む (〔B〕 (3) 1: 61, vol. III, pp. 124-138)。レイはバークともどもに (シンサムともどもに) 自然権論を否定する。そして、シンサムにも未完のレイの批判がある (Bentham Mss., Box LXIX, ff. 57-68)。レイは W・ペイリ (William Paley, 1743-1805) と似て神学的功利主義者である。

(3) 打ち壊された 'Old Meeting House' の歴史については、Catherine Hutton Beale (〔B〕 (3) 1: 22) が詳しく、ビールが依拠した文献は、Rev. John Reynell Wreford, *Sketch of the history of presbyterian nonconformity in Bir-*

irmingham, Birmingham 1832; William Hutton, *An History of Birmingham*, Birmingham 1781, 6th ed., 1836. 彼の他であるが、特に Joseph Hill のノートを参照したと述べている (Wreford の書名中、Sketch をかの女は落している)。

ヒールによれば、Old Meeting House の再建の話は、暴動による破壊の直後に出ている。一七九一年八月十九日、W・ウィズリングの土地を借りて再建することが提案されたが、条件が折り合わず、結局、その後旧跡地に再建することが決まり、それは実現されて、一七九五年十月四日開館した (*ibid.*, p. 39)。それが、経営難のため鉄道会社 (London and North Western Railway Company) に売却されたのは一八八一年である。三万ポンドであった。

Anon [(B) 2; 16] 及び Old Meeting House の略史 (pp. [I] -II)、『New Meeting House の略史 (pp. II-III)』に触れている。

四、暴動にかかわる諸人物

(1) Dr. Samuel Parr (1747-1825)

1、『カーティス文書の結果』の前後

一七九一年七月十四日、パー博士は招かれてオクスフォード大学のモードリン・カレッジの創立記念祭の主賓席に就いていた。パーミンガムからはハトン (Hatton) に住むパー家に避難するよう警告が友人から届いた。パー夫人は

娘たちと避難したが、パーの蔵書は隣人の納屋に置いてもらい、翌日農作業荷車に積んでオクスフォードに運び、モードリンの使っていない小屋に数週間置いてもらった。

パーの発言中、最も著名なのは、辛辣な暴動批判である。暴動後間もないパーミンガムの夕食会で、かれは、起立して「国教会万歳 (Church and King for ever)」の乾盃に和することを最初、拒否した。一同が非難すると、起ち上り、堂々とこう述べた。「わたくしは議長から乾盃を強いられたのですが、自分なりの批評をつけてそうしたい。では、諸君、教会と国王万歳！ かつてはこれはジャコバイトの乾盃の辞でした。今は放火犯たちの乾盃の辞です。それは、福音なき教会と法律を超越した国王とを意味します。」これは、非常な勇気のある発言ではないであろうか。

一七九一年八月、パーは毎年恒例の旅行に出、ロンドンで、J・マキントッシュ (James Mackintosh, 1765-1832) に会った。マキントッシュの『フランスの擁護』 (*Vindiciae Gallicae*, London 1791) は一躍有名になったウイグ的フランス革命支持文献であった。パーは、バークの『フランス革命の考察』 (*Reflections on the Revolution in France*, London, 1790) に一瞬よろめいたが、マキントッシュがバークの「魔力」 [Parr, (B) (3) 1: 102, p. 63] から解放してバランスを回復してくれた。

マキントッシュは九月にハトンにパーを訪れた。パーはマキントッシュをパーミンガムに案内し、暴動のあとの廃墟を見せた。更にパーはマキントッシュをコヴェントリに伴い、そこで「国教会」派と平和の希望を抱いた会談に臨んだ。その結果が、パーの著作『カーティス文書の結果』 [(B) (3) 1: 102] である。カーティス師 (Charles Curtis, 1757-1829) は、後にカンバーランド (Richard Cumberland, 1732-1811) が言っような貧乏僧ではなく、「比較的裕福な僧の一人で……パーミンガムとハトンの中間に住んでいた」 (Derry, (B) (3) 1: 49, p. 130)。そうして、二人の仲は良くなかった。暴動の前年の八月、パーは、かれを批判した記事がセント・ジェイムズズ・クロニ

クルに載ったから見るようにという匿名の手紙を受け取った。その筆者をカーティスと誤解したパーとの間に火花が散る事態になるが (Cf. *Sequel*, p. 138 note)、カーティスがプリーストリの文書が手に入ったら政府に送付しただろうと言った言葉に、パーは、プリーストリからの手紙を所蔵していただけに恐怖を感じていた。このような時に、コヴェントリのマーシュ博士が両者の仲介を買って出たのであった。マーシュとエディンバラ大学で知己を得ていたマキンントッシュも同席した。カーティスは匿名の手紙の筆者でないことを強調したが、パーは謝罪しなかった。その時マキンントッシュがプリーストリの手紙のことを質して、それは政府に送るつもりという段階の話ではなく、既に一通はピットに、もう一通が別の政府要人に届けられているという回答をカーティスから引き出した。パーは、匿名の手紙の筆者をカーティスと確信し、会議は分裂した。

カーティスは会合の内容を印刷し、知友に配布したが、それが『セント・ジェイムズズ・クロニクル』に載った。パーには、カーティスがロンドン市参事会員の兄ウィリアムと共謀しているように思われた。一七九二年早々、『カーティス文書の結果』が刊行された。『結果』はカーティス側の文章も、マキンントッシュの会議録も含む詳細な記録であった。匿名の手紙からカーティスの私文書、『セント・ジェイムズズ・クロニクル』の記事にいたるまで収録された記録であった。

「序」でパーは、読者に対して、「威厳に欠け有用性に乏しいやりとりの詳細でわずらわせて申し訳ない」と、断っている。そして、「カーティス氏のような僧がわたくしの道徳感情に、深く死に至るような傷を出来るならば負わせた」と固く決意していることを示す時」にでも、自分は正当なことを踏みはずすわけにいかないと云う (*Ibid.*, pp. vii, vi)。

しかし、事態は意外な方向に展開した。匿名の手紙の筆者が判明したのである。トム・シェリンダン (Tom Sher-

idan)。パーは、このことの公表を拒んだが、やがてカーティスとの和解に応じた。

『結果』においてパーは「国教会に対する変らぬ愛着」を述べるが、プリーストリの異端については専門の神学者にゆだねると言う。なぜなら、パー自身はプリーストリの信仰を真面目なものと考えるし、かれを友人とする自分の権利を留保するからである。これは、パーの市民的、宗教的自由の原理に由来する態度である。「わたくしは服従の垣根を壊そうとは思わない」とも言うが、それは誤解を招くかもしれない程に自由を擁護するからである。しかしかれは、ラディカルではなかった。年議会や普通選挙をかれは求めない。かれが考えていたのは救貧法の改訂、刑法の緩和、腐敗自治体の規制、警察制度の確立、立法府の教育への注目であった (*Ibid.*, pp. 106-7, 110, 51-57)。

フランス革命については、「部分的な悪行が最後にはともに働いて一般的利益を生むし、人間精神の最も高貴な力呼び求められて作用するであろうし、公共の幸福の蓄えが確保され増加するであろう。」パークのいう反革命ヨーロッパ連合はヨーロッパ全体を廃墟にする戦争にならざるを得ないとして、パーは反対する。「それに比べるとペイン氏の論調のほうが理論において新しさが少なく実践において有害さが少ない。」ペインの人間の権利の理論は、「諸国王の権利」のための戦争より脅威は少ない (*Ibid.*, pp. 72-85)。

『結果』はそれでも読者を得て、版を重ねた。しかし、反論は、カンバーランドのもの [(B) (3) 1:47] だけであった。カンバーランドは、カーティスを救うよりもむしろパーに対して揶揄的であった。「かれ〔パー〕の気質は高慢、かれの論説は独断的、かれの言葉は汚く、かれの目は野心的、歩き方は威張っていて、かれの行いは一般に虚栄、不合理、自慢たらしい」(*Ibid.*, p. 14)。この書物については、後にまた触れる。

一七九二年五月十四日、『結果』の刊行後間もなく、パーはエドワード・ジョンストン (Edward Johnston, 1757-1851) に宛て、非国教徒がまた七月に集会を催すらしいと聞いて、憂慮に耐えない旨を書き送った。それを阻止する

ために書かれたのが、『イレノポリスからイリュエセロポリスの住民への手紙』(A letter from Iren (o) polis to the inhabitants of Eleutheropolis. (B) (3) 1: 100) である。デリーは、この書物のほうが『結果』よりパーの筆力をよく示していると言う [Derry, (B) (3) 1: 49, p. 147]。そうかもしれないと、わたくしも思う。しかし、デリーが、この書物は単線的に非国教徒に集会を思い止まるように説いたものと考ええるのに対して、わたくしは、暴力的に改革派を潰そうとする体制側の暗い部分に向けても語っていると考えることも不可能ではないように思う。この意味でわたくしは、パーの筆力が『手紙』においてより強く出ているように思う。

一七九三年、一月二十一日にルイ十四世が処刑され、二月一日、対フランス戦争が生じた。一月三十日、ロチェスターのホーズリ僧正の反革命説教の聴衆の中にパーもいた。T・G・ストリート (T. G. Street) はその時のパーが説教の最中に怒り始め、「へら棒な理論だ」と幾度も叫び、やがてギリシア語で怒りの批判を続けたと言われる (Parryna, Vol. 1, pp. 497-8)。しかし、これはもう、プリーストリ暴動とは直接かかわりのない話である。

なお、ちなみに、マキントッシュ側の資料としては、パーから受け取った書簡一通がある。

「^{デア、サー}拝 啓 土曜日に小包を拝受しました。丁重な回答と貴兄自身の立派な小冊子が入っております。わたしはそれを二度繰返して嬉しく感嘆しつつ拝読しました。心から推賞せずにおれません。『結果』第二版の付録には少しばかり追加資料を入れてあります。われわれの意見が非常に一致しているため、あなたとわたしとがノートを見せ合ったと一般に思われるかもしれません。しかしわたしは穩健だし僧侶ですから、あなたの本のページ毎、一章毎にわたしを魅了した熱心な怒りの調子、想像力のすばらしさ、説明の徹底した厳しさをわたしは持っております。わたしが異論を唱えるような思想はいささかありません。ただ、卒直に申し上げると、四、五ヶ所の言葉をほんの少し、少しだけ変えて頂けたらと思います。しかし、全体に高遠さ、人間らしい気の使いようがあって、

大多数の読者がわたしも気付かない不正確なところに気付くことはないと思います。……

奥様によりしくお伝え下さい。

変らぬ敬意をもって

一七九二年七月八日

S・パー

(*Memoirs of the life of the Right Honourable Sir James Mackintosh*, edited by his son, Robert James Mackintosh, Esq. in two volumes, vol. 1, London 1835, p. 53.)

なおここでのパーの批判の対象となった Charles Curtis (1789-1829) を装って弁明したのが、前述の匿名、「ナンバーランドの」Curtius… (B) (3) 1:47] である。はなはだ得るところの少ないこの弁明は、自分のようなおとなしい教区牧師、いわば田舎坊主に論争で勝ったところで、またギリシア語、ラテン語で自分の弱い知性を打ち負かせたところで、それが一体何になるのでしょうか (*ibid.*, p. 25.) ということに尽きる。自分はパーミンガムの七人の暴徒をテーベの前の七人の首長にたとえたこともなければ、非国教会派会堂焼失をオリンピックの祭典になぞらえたこともない (pp. 25-26.)。

パー博士が自分にあびせた非難の半分を聞くだけで、パー博士の我慢のなさと自分の我慢強さが分る (p. 8)。これがこの書物の最初の部分で強調したことであつたから、この書物の論議の水準が推定出来るであらう。そうして、フランスとかという地表上の一地点に対して偏った見解を持たないで下さいと、パー博士に呼びかけた箇所 (pp. 21-2) は、著者の反フランス感情、つまり人権原理に対する反対を洩したものであつた。

最後は負け犬の遠吠である。わたしの無知を天下に公表しようとして、あなたは悪人ぶりを公になさつたのです

(p. 43)。

Peck and Wilkinson [(B) (3) 1: 103, p. 185.] は、カーティスがセント・マーティンズとソリハルとの教区牧師であったことを伝え、カーティスはプリーストリの手紙はどれでも押収出来たら政府に送るつもりであったと述べたことを記録している。このカーティスは、前述のように一七九八年にロンドン市長に就任したウィリアム・カーティスの弟で、狩猟などにうつつを抜かすスポーツ坊主であった。晩年、批判する詩のほか、ごまをする詩も書かれてゐる (Morfit & Weston)。

2、『平和な町から』の刊行

パー博士の有名なパンフレット [(B) (3) 1: 100] は匿名で出たし、タイトル中にもミスプリントがあった。Irenopolis は後の版で訂正されるように Irenopolis であって、これは city of peace を意味する。Eleutheropolis は city of freedom を意味する。つまり『平和な町から自由な町の住民に宛てた手紙』、即ち国教会の一員による「バーミンガム非国教徒への真面目な訴え」ということになり、発行地はロンドンであるから、「平和な町」とはロンドン、「自由な町」とはバーミンガムである。ここでは、第二版 (一七九二年) を使用する。

パーは先ず、イギリスの現体制 (混合体制) を賛美する。ブラックストーン (Sir William Blackstone, 1723-1780) と基本的に同じ姿勢であり、この点で非国教徒と国教徒との間に大差はないから、パーが次のように述べてもおかしくない。「わたくしが思うに、混合政体の特徴づける基本原理の英知と有用性とにわれわれは満足している。寛容な神慮はわれわれが父祖代々その体制の下に生きることを許してくれた。……王制の擁護者は必ずしも自由の敵ではないし、自由を愛する心は王制を尊敬する心と両立しないわけではない」(p. 6)。

意見の違いはいろいろな環境の違いで出来るが、たいていは程度の問題であって、理性的に解決しようとするれば可能なのであると、パーは物理的暴力の行使をいましめる。小さな違いを大きくするのは不名誉にしかならないとも、かれは言う。このような国民的合意を確認したのは、この書物の訴えようとする対象とされている「パーミンガムの非国教徒」よりは、暴動を起したと目される国教会高教会派にこの確認に対する同意を求めているように思われる。

続いてパーは、非国教徒に呼びかける。「あなた方は寛容ではあるが理解力に富む大衆に次のことを信じるよう説得すべきです。平和は自由とともにあなた方にとって等しく貴重であること、あなた方には気をゆるめることが罪な場合に気をゆるめない決意の堅さがあり、譲歩するのが義務な場合には譲歩する英知があること、ユニタリアニズムの教義の特異性はキリスト教の実践的規則と完全に両立すること、またあなた方は、フランス政体のためでたい変革を賞讃なさるけれども自分の国の政体に何ら直接、間接の危害を加えることを考えておられないこと、以上です」(p. 50)。

右のことは、非国教徒にとって当然なことであって、パーの忠告を待つまでもなかったが、非国教徒に人権上の差別を設けていた国教徒の側にこそ、むしろ「譲歩が義務である場合に譲歩する英知」が要請されるべきであった。パーの意図もむしろそこにあつたらうか。しかもパーは、それを言うのにある種の「危険」を賭していたのである。「あなた方に正当なことをし、正しいことを語ったために、異常、無礼、背教という非難さえも浴せられる危険を犯して来ましたし、また再び犯ししましょう」(p. 50)と自分のことを語っている。パーは、プリーストリラの主張の多くを支持しない。しかし、「敵でもありません」と明言する。ユニタリアンの私生活のつましやかさ、勤勉、時間的規則性をパーは認め、評価していた。そうして、暴動の件に入る。

「最近のある嘆くべき事件については、あなた方は誤り伝えられて来たのだと信じます。——あなた方が不当に扱

われて来たことを承知しています。——その誤解が続いてはなりません。」パーは被害者たちにこのように述べて、加害者に対する非難あるいは被害者に対する慰謝もしくは謝罪でもこのあとに続くかのように予想させる。しかし、かれの言葉は意外にも全く違うものであった。「それでこのような誤りが繰返されるのを避けるために、あなた方の判断力、感情、良心に訴えたいと思います」(p. 9) 傍点は原文のイタリック)。これは、加害者の国教会(パーはこの点に慎重に触れないようにしている)の態度はにわかに変え難いと考えて、非国教徒側に柔軟な対応を要請したものであるうか、それとも非国教徒に呼びかける形で内心は国教会側に呼びかけていたのであろうか。以上が暴動に対するパーの概括的態度であって、以上の姿勢は最後まで一貫する。

七月十四日の祝賀会評価もその一例である。パーは、祝賀会開催の噂を信じられなかったと言う。抑圧を招く危険に自ら飛び込むと、いわば狂気の沙汰に思われたというのである。しかしパーは、その狂気の沙汰を他の人は「犯罪的」と言うかもしれないけれども自分はそうは言わないで「あり得べからざること」と考えると言う。挑発的行為をしたのはあなた方だと非国教徒に向ってたしなめながら、本当にたしなめてはいないのである(p. 10)。

「あなた方は適切な目的もなしに反抗を呼び起しているように見えます。あなた方は義務を果すという口実がない場合に自分で災難に飛び込んでいます」と。このあとの表現は実に微妙である。「わたくしが思うに、あなた方の敵がせき立てられている罪と不幸について主な責任は今やあなた方自身にはね返らなければなりません」(p. 11)。見られるように、罪を犯しているのは「あなた方の敵」のほうである。

更に、パーは次のように駄目を押す。あなた方は、集会は法律で禁止されていないから会合は非難されるに当らないと言うかもしれないが、「わたくしはその事実を承認するけれども、その結果を否定する」と、会合の合法性の承認と会合のもたらす結果の適宜性の否定とをあわせて主張する。こう見て来ると、パーの発言は国教会と非国教徒と

の双方に対する両面批判であることに気づく。国教会には合法性の尊重、非国教徒には合法的なことの適宜性に対する配慮を、求めるのである。しかし、次の一文は、非国教徒に対してよりも国教会に向って説いていると考えるべきであろう。「デモクラシー性と正義との混合した法則があります。すべての善良な市民は平穩を破ったり、市民仲間の正当な権利を侵害したりしないようにそれを注意深く守るべきです。——宗教の法則があります。それは、仲間のキリスト教徒の誤った者を侮辱したり、偏見を持つ者に傷を負わせることを禁じています」(p. 13)。こう見ると、このあとパーは会合を再び開いてはならないことを繰返すけれども、それはむしろ国教会に暴徒側に向っての戒めであったとも考えられる。確かに、裁判で多くが釈放になったことに触れて、多くの者が不満を感じているけれども、あなた方がまた集まれば世論に挑戦したと陪審は考えるでしょう (p. 20) と述べる個所はあるが、この発言とても裁判に不満を持つ者の多いことを国教会側に述べているようにも思われる。他人に法律を犯させるような激情をかきたてておいて、あなた方がこの国の法律と憲法(国家構造)に愛情を持っていると言っても通用しません (p. 14) と説くのも、真意は、暴動が法律を明白に犯したのだという点の指摘であったのではないであろうか。

こうしてパーは、非国教徒に向って二度と集会を開いてはいけないというただ一つの主張を説くために、非国教徒に對立する国教会に暴徒側の暴行の性格を解明したのである。そこで、わたくしのこのパンフレットの紹介はこれ以上は必要ないのであるが、若干、思想的に興味ある断片を拾っておく。

ペインについて、パーは俗物と断定するが、ペインの読者が無知で不満を持つ者の間に広まっている事実をも認める。ここにも、時代の変革期における労働階級の不満がどちらの方向にも発火し得る状態であることが見えている。しかし、ペインは体制にとって脅威である。とりわけイギリスにとって、統治をどんなものにせよ悪とし、君主制を否定し、男子普通選挙を主張するペイン以上に脅威はなかった。パーもペインには強く反撥した。それで、パーが次

のように非国教徒に説いて、つまりユニタリアンの頭上にある圧力（宣誓法と自治体法）を除去しようと思っただけ、心やさしい人びとを脅さないことですと説いた時、この時は非国教徒に心からペインへの同調を慎しむように忠告していた（pp. 23-3）。

このパンフレットはこうして、非国教徒の「慎慮」（p. 33）に訴える形を取っていた。パーは最後に「慎慮」だけでなく「良心」にもあわせて訴えたいこととして、非国教徒に（おそらくそれに劣らず国教会にも）賢明かつ有徳な決意を促した。パーは、一つの町の暴力沙汰は、たちまちに近隣に及ぶ危険、それが州に及び一週ないし一月で全国に及んで「反乱（REBELLION）」（p. 34）に至る危険を説いた。自分たちの町の平静を維持するようにパーミンガムという「自由な町」の人びとの「慎慮」にパーは訴えたのであったが、イギリス全体の平静の維持を考慮に入れてもらうのには「良心」の抑制力をも必要としたのである。このパンフレットに、「慎慮」と「良心」との作用についての説明はない。それは、パーの他の著作の中を探るべき課題である。

このパンフレットは一七九二年五月十七日に一日で書き上げられたことが記されている（p. 36, 40）。

(2) Josiah Wedgewood (1730-1795)

J・ウェジウッドについては、Llewellywynn Jewitt [(B) (3)1: 71, pp. 420-421.] が言及している。「ウェジウッド家の旧友ブリーストリ博士は、難渋のさ中にも、パーミンガムの不名誉で野蛮な暴動の後にも、エトルリアに逗留するよう招かれた。かれの家は、知性に輝き、科学あるいは芸術に秀でたどんな階層、地位の人も迎え入れた。かれは、ブリーストリ博士に年金を気前よく寄贈する一人であった」。右の文中、エトルリアというのはウェジウッドの製陶工場と住居のあった地名である。E・ダーウィン（C・ダーウィンの祖父）の『植物園』（*Botanic Garden*,

London 1789-95) 中の Etruria medallion についての詩がある。それは、ウェッジウッド製の二つのカメオを謳ったものである。C. C. Hankin (ed.) [(B) (3) 1: 62, vol. 1, pp. 221-249.] はプリーストリへの言及を含むフランス革命論であるが、E・ダーウィンへの言及 (vol. 1, pp. 237-248) をも含む。

ウェッジウッドは、一七九一年には何も書かなかったが、一七八三年のパン暴動のさいには、*An address to the young inhabitants of the pottery, Newcastle 1783* を書いている。

(3) William Withering (1741-1799)

ウィズリングについては、[(B) (3) 1: 103, Vol. 1, pp. 115-122.] に詳しい。すでに杉山が書いたようにかれは国教会信徒であったし、祝賀会にも出席していなかったが、迫害を逃れた他の家族を自宅に受入れたりして、結局無事ではすまなかった。多くの書物と博物学の標本類が灰燼に帰した。かれと家族は、乾草を積んだ荷車に体を隠し、人通りの最も少ない凸凹の小径を逃れた (p. 121)。多くの隣人たちが、最も危険な時にウィズリングの周りを囲んで守り、親愛の情を示した。幾人かの人が放火者たちの裏をかこうと懸命の努力をした。生命がけのこの防衛努力がカタストロフをおくらせた。一党を説得し、追いついても別のが来て、結局軍隊以外に阻止出来るものなかった。ウィズリングは次のように詩の中で反省している。

「おゝ、宗教よ、汝天からの贈り物よ、

地上の悪魔どもは何と奇妙な目的に、汝を捧げるものか！」

しかしウィズリングは言う、「しかし、わたくしが正しいと信ずるところを行うのを、名誉あるいは判断が危うくなくなっても、妨げるものではなかったし、これからもそうである。なぜなら、それをすれば、どんな結果になろうと

も自分を支えてくれるのに十分な自己是認が生じるからである。」ウィズリングの伝記作者は、ウィズリングが僅か一五〇ポンドの補償しか得られなかったこと、しかしお金に換えられない損失を何ものも償えなかったと述べたあと、後世はこのような兇悪事件が発生時点で鎮圧されなかったことを信じられまいと、結んでいる。

ウィズリングは、一七九一年の暮にリンネ学会のフェロウに選ばれた。

(4) Matthew Boulton and James Watt

「ボルトンとウォットとはソーホーにバリエードを築き、職人たちを武装させたが、幸い暴徒たちはそちらには来なかった。この時に用意されたいくつかの武器は、今もなおボルトン・ウォット・コレクションに見ることが出来る。」このあと、ウォットの長男のことに記述が移るが、ここでは必要ないであろう。H. W. Dickinson, *James Watt, craftsman and engineer*, Cambridge 1935, pp. 162-3.

(5) The Lunar Society

プリーストリがメンバーであった月協会が一般にフランス革命を好意的に迎えたことは、Hankin (B) (3)1: 62, pp. 181-5.) および Schofield (B) (3)1: 113, p. 359.) に明日である。スコフィールドによれば、一六八八年の名誉革命を記念する「革命記念協会 (Revolution Society)」がプリーストリの助力を得て (しかしプリーストリは加入しないで) バーミンガムに作られ、夕食会を開催しているということである (*Ibid.*, p. 359.)。しかし、スコフィールドはその会の結成、夕食会のいずれの年月も明白にしていない。わたしはロンドンでは少くとも一七八八年と一七八九年年には記念の会が開催されたことを確認しており、それも各年一つだけでなく複数の会合があったことが確かだ

あるが、スコフィールドは詳細を記していない。

しかし、暴動後の月協会の会合が九月にバーミンガムから四マイル離れたバー (Barr) にあるモルトン (Samuel Galton) の家で行われたことを、スコフィールドは記している。J・ウォットはピストルを携行したというし、プリーストリーはもちろん欠席した。

月協会のメンバーは、その一部しか被害を受けなかったことで知られるように、考え方はさまざまであった。ボウルトンは革命フランス政府と取引するつもりであったが、革命を支持する態度を見せない実務家であった (*Ibid.*, p. 362)。

また、スコフィールドによると、プリーストリーの『訴え』 (*An appeal*……, (B) (2) 79) は印刷シートのままでモルトン、ウイズリング、ケアに送られ、読んだ三人全員が刊行に反対したけれども、プリーストリーは耳を傾けなかったらしい。三人ともプリーストリーの財政的援助者であった。プリーストリーに援助の手を伸ばしたのは右の三人だけではない。月協会のメンバーとしては、J・ウェッジウッド (Josiah Wedgewood, 1741-99) が暴動直後に身を寄せるよう招かざる (J. Wedgewood to J. Priestley, July 1791, in H. C. Bolton, *Scientific correspondence of Joseph Priestley*, p. 112) ことは、既に触れた。そしてまた、E・ダーウイン (Erasmus Darwin, 1731-1802) がその有力メンバーであるダービー哲学協会 (Derby Philosophical Society) がプリーストリーの無事脱出を慶賀する手紙をプリーストリーに届けたことは、プリーストリーの『訴え』 (pp. 157-8) に収められているから分る。そこでダービー哲学協会はプリーストリーをガリレオとソクラテスになぞらえている。

そして、スコフィールドは「バーミンガム暴動は月協会の終わりの始まりを印している」 (*Ibid.*, p. 360.) と書いた。これは正しくないと反論したのがE・ロビンソン (Eric Robinson, (B) (3) 2: 18) である。ロビンソンはスコフィ

ワールドの論議は「水も洩さぬものではない」と言う。J・ウォットの現金出納帳を検討したロビンソンは、一七九三年以降一八〇四年まで月協会が存続した証拠があると言いつ、G・ウォット (Gregory Watt) やM・R・ポウルトンの資料からも一八〇一年までの出席が確認出来、月協会の存続は一八〇七年までの言及があると言う。「月協会はブリストリ暴動後消滅しかなかった。それは息子たちの定期的な出席により十九世紀まで存続した」(Ibid., pp. 14-15.) の論文のタイトルは、'The origins and life-span of the Lunar Society'。

Albert Goodwin [Op. cit. p. 182] も暴動は月協会を終らせなかったし、「憲法知識普及協会」も持続したと指摘している。

(9) Joseph Priestley

1' Magazine articles

Birmingham Reference Library が所有する Magazine articles etc. relating to Joseph Priestley [(B) (3) 1; 90.] の内容は次の五つである。

1. *The European Magazine, and London Review*, for August 1791, pp. 83-86.
2. ? , 1767, pp. 202-206.
3. *Gentleman's Magazine*, Supplement 1791, pp. 1215-1221.
4. ? , 1791, pp. 145-152.
5. ? , 1791, pp. 596-600.
6. *Monthly Review*, 1792; September 1806; October 1807.

7. *Edinburgh Review*, October, 1806.

右のうち、？は誌名の不明なものである。2は、一七六六年にプリーストリの行った電気の動物実験記録である。4は詩⁵、*The late riots at Birmingham*と題されている。⁵は *Dr. Priestley's address to the inhabitants*……である。

2、書簡から

プリーストリ [(A) 18] のうち、暴動に関連したものは、第十一書簡から第三十三書簡までである。第十一書簡 (一七九一年八月二十日) は、バーミンガム暴動の精神について『訴え』を書いていることを伝える。第十二書簡 (九月五日) はゴルトンからプリーストリ宛のもので暴動に触れている。第十四書簡 (日付なし。九月と推定されている) はプリーストリからウィルキンソン宛の書簡で、移住を考えていることを伝える。第十六書簡 (十月十日) はウィルキンソンからプリーストリに宛た返書で、フランス定住を勧めている。第十七書簡 (十一月二十三日) は再びプリーストリからウィルキンソンに宛たもので、『訴え』について助言を求めている。第十八書簡以下は一七九三年以降のものであるが、第二十九書簡までは九三年、第三十書簡から第三十六書簡までが九四年である。第二十二書簡 (五月十六日) はアメリカ移住の考えを述べたプリーストリからウィルキンソン宛、しかし第二十四書簡 (六月二十日) は移住しない決意を述べるが、第二十八書簡 (日付なし、おそらく九月) はアメリカに移住することにした決意を伝えている。第三十二書簡 (九四年二月七日) はイングランドを離れることの無念を述べたプリーストリの手紙である。第三十三書簡 (六月十四日) はアメリカから出されたプリーストリのウィルキンソン宛のもので、航海の様子とニュー・ヨーク到着時の歓迎の模様を書いている。

c' John Disney on Priestley

プリーストリが亡くなった時、数多くの葬送の辞が述べられた。J・ディズニ (John Disney, 1746-1816) の追悼説教もその一つであって、代表的なものの一つと言っている。

その中にプリーストリの渡米について言及がある。J・ディズニの『説教集』(B) (3) 1: 53, vol. III, Sermon VI. On occasion of the death of the Rev. Joseph Priestley, LL.D, F. R.S. & c., who died at Northumberland in Pennsylvania, North America, on the sixth of February, 1804, pp. 93-115) 中にそれは収められてゐるが、この説教は単独でも刊行されている。わたくしの見たのは第二版である。John Disney, *A sermon preached in the Unitarian-chapel, in Essex Street, London, Sunday April XV, MDCCCLV, on occasion of the death of the Rev. Joseph Priestley, LL. D. F. R. S. & c. who died at Northumberland in Pennsylvania, North America, February VI, MDCCIV*. Published at particular request. The second edition, London 1804. 暴動と移住の件は、*Ibid.*, pp. 12-14.

「一七九四年にプリーストリが西方世界に移住したのは自発的だったと言われるかもしれませんが。それはそうでした。しかし、かれの居住を非常に不安定にし、そのために、市民生活の調度では相当にわが国より遅れてもおり宗教問題で一般にわが国に劣らず頑迷な国に自らを追いやるほうが——かれの心の中では、自分の祖国で生涯の残りを送り目を閉じるよりましだったのは、われわれ国民にとって恥辱ではないでしょうか。——このような人がアメリカ諸州と、そこにある狭い社会とで得られる個人的安全のほうを、ブリテンの自由と安全、また旧友すべて——宗教、哲学そして合理的自由の友人たち——との良好親密な交わりより好ましく思わせたのは、わが国にとって恥辱ではなかったでしょうか。」(*Ibid.*, pp. 12-13.)

デイズニはこう述べて、移住は「絶えず別れの苦痛を更新する」から死別よりも辛かったことを示唆する。しかし、やはり死別にまさる苦痛はない。「友人より生き長らえてこのような喪失と欠落を人間の死の通常の流れの中で順次生じる度毎に考えさせられるのは、あまりに苦痛です。」(*Ibid.*, pp. 13-14)

4 T. S. Coleridge and Charles Lamb

プリーストリにかりそめならぬ尊敬の念を抱いていたのがコルリッジであることはよく知られているが、そのほかにもラムがコルリッジに劣らずそうであった。コルリッジはプリーストリに会ったことはなかったが、ラムは会っている。「コルリッジ、ぼくは君の『宗教の楽しみ』を読んでしばらく君に優越感を持ったよ。ぼくはプリーストリに会ったことがあるのだ。君の作品中にかれの名前が繰返し出て来るのは嬉しい。かれに対する多くの愛と尊敬はほとんど冒瀆的だ。もし君がまだかれの説教を読んではければ、読むときと魅きつけられると思う。必然論を述べたかれの本は間違いなく読んだことがあるはずだ。ペインに答えたかれの最近の著作には、かれの親友リンズィが書いた序文が付いていて、かれの人となり人類への貢献について述べており、君の一読に価するよ。」(Letter I. (B) (3) 1: 79, p. 579.)

「……ぼくは今スコットランドの博士たちを検討したプリーストリを三回目読み直しているところだ。かれらをつるし上げるなんて、それも三人一緒にだ、かれもたいした腕力だ。その明哲な、力強い、おどけた、非常に面白い理論作品を君は読んでいるに違いない。もしそうでなければ、手に入れて、絶妙な味を楽しみ給え。ぼくはプリーストリの著作をもっと欲しい。」(Letter XIX, January 2, 1797. (B) (3) 1: 84, p. 610.)

ラムは別の手紙でもプリーストリを尊崇すること、罪に当る程だと述べる (Letter XXI, January 10, 1797. *Ibid.*,

p. 615)

プリーストリに対する崇敬の念をラムと共有したコルリッジがプリーストリを謳った詩は、次のようである。
プリーストリ

かの腹黒き大臣おとどが起せし野蛮な暴動、

われ等がプリーストリを大洋のあなたに

追いやりぬ

迷信や同類の残忍なものが追いつめ、

かれの温和な輝きは萎え衰えぬ

静かに明るい部屋にかれの住いはあれ！

見よ！ かれの強き命めいにて宗教は

穏やかな怒りもて法王の呪文から始まり、

地上に投げ落すは、安びか衣裳

司教冠を着けた国家、七面倒な穢れた華美。

正義は目覚めて抑圧者に泣くよう命じ

泣き寝入りの愚の誤りを非難する

柔らかな自然は暗い隠れ家を出て英知を得、

ゆっくりと貴婦人よろしくヴェールを脱ぐ

見つめる児に愛の微笑みを与えつつ。

コルリッジ『ソネット』Ⅲ [(B) (3)1: 41, p. 59.]

見よ、かしこのプリーストリを

愛国者、聖人にして、かつ賢者。

齡^い重^いね来^いしかの人を

そが愛したる祖国より

血まみれの政治家、狂信頑迷の坊主ども

黒い嘘もてわけ知らぬ民を

たぶらかせ、

空しき憎しみを浴せて

立ち去らせた。

静かに、憐れみつつ、かれは退き、

こうした約束された歳月に

期待込めつつ、想いめぐらす。

コルリッジ『宗教の楽しみ』Ⅱ [(B) (3) 1: 41, p. 81.]

SELECT BIBLIOGRAPHY

(1)の文献目録は、The British Library, The Goldsmiths' Library, The Birmingham Central Library, The Birmingham Reference Library, Public Record Office とあちの語彙、あち Dr. Martin Smith, Bibliography in his 'Conflict and Society in late eighteenth century Birmingham, Cambridge Ph. D. thesis, 1977 とあち作成した、書名のあちの () は羅字であちの注記であちの。

(A) Manuscripts**—Birmingham Reference Library—**

1. Account of the damages done to the property of Messrs. Dadley and Palmer of the Hotel (in Temple Row) Birmingham, by the Rioters on the 14 July 1791, with a statement relating to the account, 1792.
2. Bedford, W. K. R., Notes from the Minute Book of the Bean Club, 1754-1836, (made in 1889).
3. Bissett, James, Reminiscences, (1800).
4. Boulton and Watt Collection.
5. Garbett-Lansdowne correspondence, 1766-1802. 4 volumes, Photostat copies (from Shelburne papers).
6. Humphreys, G., The claim of George Humphreys against the Hundred of Hemlingford for damages at Sparkbrook House during the riots, July 1791. Brief for the plaintiff, (1792).
7. Hutton, T., Five briefs used by Counsel : D. P. Coke, G. L. Newnham, Dayrell, Balguy, and (Sir) S. Romilly and miscellaneous papers relating to the case of Thomas Hutton's claim for compensation for damage sustained in the riots of 1791, (1792).

8. Hutton, T., Inventory of household goods, &c, destroyed in the riots of 1791, (1792).
9. (Hutton, W., Inventory of household goods, &c., destroyed in the riots of 1791) (1792).
10. ——Another copy, with list of salvages and index, 1792.
11. Hutton, W., A narrative of the dreadful riots in Birmingham, July 14, 1791, particularly as they affected the author, 1791.
12. Hutton, W., Three briefs used by Counsel: S. Romilly, D. P. Coke, and G. L. Newnham, with their notes made in Court; plaintiff's declaration, and miscellaneous papers relating to the cause of William Hutton's claim for compensation for damage sustained in the riots of 1791, (1792).
13. Jukes, Joseph, A personal account of the riots in the town of Birmingham and its vicinity, July 1791, Typescript (1954).
14. Kingswood Chapel, Hollywood, King's Norton, Memorial and petition of the Society of Protestant Dissenters, Oct. 28, 1793 (with manuscript documents relating to the rebuilding of the Chapel and Parsonage after destruction by rioters from Birmingham in 1791). see below (B) 2, 96.
15. Lee MSS.
16. Pearson, H. S., The Birmingham riots of 1791, in H. S. Pearson Lecture notes and memoranda, fol. 1893-1915.
17. Priestley, J., Inventory of Dr. Priestley's house, library, and laboratory, etc., destroyed during the riots at Birmingham in 1791, 1792.
18. Priestley, J., A collection of 68 letters written chiefly by Joseph Priestley to John Willkinson, 1789-1802, Photocopies made...at Warrington Public Academy in 1951.
19. Request sined by John Ryland to Joseph Carles, Esq. and the Rev. Dr. Spencer to levy damages upon the Hundred of Hemlingford for losses sustained in the riots of 1791, 1792.

20. Russell, Martha, On the riots in 1791, (1800). Typewritten copy, 1835, 1872 and 1937.
21. — See also Jeyes, S. H. and Russell, M. Below [(B) (3) 1; 73].
22. Taylor, J., Copy of the proceedings (from the short hand notes of Marsom and Ramsey) at the trials of a cause between John Taylor, Esq., plaintiff, and James Bingham and William Waldron, defendants, as inhabitants of the Hundred of Halfshire, (co. Worc.) being a claim for damages sustained at Moseley Hall during the riots, 1791. Worcestershire Lent Assizes, 1792.
23. Witton., P. H. and Edwards, J., Views of the ruins of the principal houses.....with manuscript note inserted, 1791.
—**The British Library**—
24. John Reeves Collection. BM. Add. MSS 16, 919-16, 931.
25. BM. Add. MSS. 4, 4992, 4, 4997/4/
—**Public Record Office**—
26. Crown Office Papers. C234/34, C234/38, C234/41
27. Home Office Papers. HO 33/1, HO 42/16--HO 42/58
28. King's Bench Papers. KB 1/27--KB 1/29
29. Privy Council Papers. PC 1/23/A38, PC 1/19/A23
30. Treasury Solicitor's Papers. TS/11/954, TS/11/541, TS/11/923/3304, TS/24/3/23
—**Staffordshire Record Office**—
31. Dartmouth Collection.
32. Quarter Sessions Papers. (Q/SB 1)
—**Warwickshire Record Office**—
33. Newdigate MSS. CR 136

34. Q. S. 90/3, 5.

—**Worcestershire Record Office**—

35. Quarter Sessions Order Books.

(B) Printed Sources

(1) Contemporary Periodicals

1. The Aris' Birmingham Gazette
2. The Birmingham and Stafford Chronicle
3. The Birmingham Chronicle
4. The Inquirer
5. The Morning Chronicle
6. The New Annual Register
7. The Parliamentary History of England, from the earliest period to the year 1803
8. The Parliamentary Register ; or History of the proceedings and debates of the House of Lords
9. The Senator ; or, Clarendon's Parliamentary Chronicle
10. The Wolverhampton Chronicle and Staffordshire Advertiser

…See also Magazine articles etc. relating to Joseph Priestley, held by BRL, below (3) 1 ; 43.

(2) Contemporary Vernacular Tracts (published in Birmingham, otherwise stated.)

1. Amicus Patriae, *Considerations on the authority of the Magistrate, commonly called the police*, London 1788.
2. Anon., *An address of the students at New College, Hackney, to Dr. Priestley, in consequence of the Birmingham riots*, 1791. (with Dr. Priestley's answer)

3. Anon., *Addresses to Dr. Priestley from his congregation at Birmingham, and the young people in it, in consequence of the riots*, 1792. (with his answer)
4. Anon., *The address, declaration, rules and orders of the Birmingham Society for Constitutional Information, instituted 20th November 1792*, 1792.
5. Anon., *Anything: or, from any where: otherwise, some account of the life of the Rev. Secretary Turn-about, the great high-priest* (i. e., Rev. E. Burn), 1792. See Burn, below 27.
6. Anon., *An authentic account of the late riots in the town of Birmingham and its vicinity, July 1791. With the letter of Dr. Priestley, and an answer thereto. Also, the letters of Wm. Russell and James Keir, with an account of the toasts at the Gallic commemoration meeting, etc.* (1791).
7. Anon., *An authentic account of the riots in Birmingham, July 1791; also the judge's charge, the pleadings of the counsel, and the evidence given on the trials of the rioters. And an impartial collection of letters, etc* (1791), (attributed to James Belcher). See C., S., below.
8. Anon., *Appendix to the account of the Birmingham riots*, 1792.
9. Anon., *The craftsmen; a sermon, or paraphrase upon several verses of the nineteenth chapter of the acts of the apostles*, a new edition 1791.
10. Anon., *Equality, as consistent with the British constitution: in a dialogue between a master manufacturer and one of his workmen*, 1793.
11. Anon., *Further authentic proofs of French perfidy and cruelty*, 1798 (?).
12. Anon., *Loyalty and humanity: or, Church and King. A poem, wherein the proceedings and publications of Churchmen and dissenters in Birmingham, from the 14th to the 29th of July, 1791, are noticed;...the religious defenders of Church and King applauded,.....*1791.

13. Anon., *Of the conduct of high churchmen, respecting the late riots at Birmingham*, 1792.
14. Anon., *A poem, on the celebration of the FRENCH REVOLUTION, in Birmingham*. (1791).
15. Anon., *Remonstrance with Rev. Mr. Clayton, on his sermon on the duty of christians to civil magistrate ; occasioned by the riots at Birmingham : etc.*, 1791.
16. Anon., *The riots at Birmingham, July 1791*, 1863.
17. Anon., *Take your choice ; reform or ruin*, 1800.
18. Armstrong, Alexander, and Sharp, Abel, *Very familiar letters addressed to John Nott? button burnisher*, 1790. (Part two only)
19. Belcher, James, See above *An authentic account of the riots in Birmingham, July 1791*.
20. Bissett, James, *The female drummer*, 1800.
21. — *Honest Jack Tar or a fig for invasion*, c. 1800.
22. — *Memoir*, see Dudley, T. B., below (3) 1 ; 54.
23. — *A poetic survey round Birmingham ; with a brief description of the different curiosities and manufactories of the place, intended as a guide to stranger.....* (1800?).
24. Booker, Rev. Dr. Luke, *Collected Sermons*, Dudley 1793.
25. Broadbrim, Hezekiah, *The Squib : or a word of friendly advice in the present crisis of affairs, to Joseph Priestley : wherein the true causes of the riots at Birmingham are traced to their source ; a cessation of hostilities proposed, etc.*, (1791).
26. Burn, Rev. Edward, *A reply to Dr. Priestley's 'An appeal to the public' in vindication of the clergy and other respectable inhabitants*, 1792.
27. (Burn, Rev. Edward,) *Any thing ; or, from any where : otherwise, some account of the life of the Rev. Secretasry Turnabout, the great highpriest*, 1792.

28. Carpenter, B., *A letter to the Rev. R. Foley, of Oldswinford. In answer to charges against the dissenters in Stourbridge, etc., with an account of the proceedings at Lye-Waste, by J. Scott, Stourbridge* (1792?).
29. A Churchman, *An authentic account of the late riots in the town of Birmingham, and its environs, with strictures and observations on the cause and conduct of the rioters. Mr. Keir's account of the meeting at the Hotel. Mr. Russell's refutation of a fallacious account of the toasts. & c; Mr. Keir's 2nd letter; and Dr. Priestley's letter to the inhabitants of Birmingham*, (1791).
30. Croft, Rev. Dr. George, *The test laws defended*, 1790.
31. C., S., see *An authentic account of the riots in Birmingham, July 1791, with an introduction by S. C.*, 1867.
32. Cutter, Thomas, *A flogging for Job Nott*, 1793.
33. Edwards, The Rev. J., *Letters to the British nation, and to the inhabitants of every other country who may have heard of the late shameful outrages committed in this part of the Kingdom, occasioned by the appearance of a phamphlet, intituled, 'A reply to the Rev. Dr. Priestley's appeal to the public, on the subject of the riots in Birmingham' etc.*, parts I-IV, Birmingham (1792).
34. — *The blessedness of those who are persecuted for righteousness sake; a discourse, delivered at the first meeting of the congregation at Kingswood, subsequent to the riots: in the Union Chapel.....*1792.
35. Field, William, *A letter addressed to the inhabitants of Warwick, in answer to several charges of a very extraordinary kind, advanced against the dissenters,...by the Rev. Mr. Miller, Vicar of St. Nicholas*, 1791.
36. Freeth, John, *The political songster*, 1790.
37. — *New songs on the present times*, 1793.
38. A Friend to Birmingham and the Constitution, *An address to the inhabitants of Birmingham, 29th April 1793*, 1793.
39. A Friend to Consistency and Truth, *Querries and observations adrrsded to Mr. Wm. Russell, respecting his altercation*

- with Mr. W. at the Revolution dinner on 5 Nov., 1790. etc.* In S. Timmons. (see below (3) 1 ; 125)
40. A Friend to Liberty and Property, *An address to the association for the protection of liberty and property against republicans...*1792.
 41. A Friend to Liberty and Property, *Observations on constitutional societies among the middle and lower classes : addressed to the association....*, 1792.
 42. *Full and accurate report of the trials of the Birmingham rioters, at the late assizes for the county of Warwick*, 1791.
 43. Hancock, Thomas Gregory, *An address to unitarians ; and in particular to Doctor Priestley. With observations, chemical and theological : proving the word-incarnate to be very-God. Being a restitution for the loss sustained by the riot*, 1791.
 44. Hardinge, *The speech of Mr. Hardinge, as counsel for the defendants, in the cause of Priestley against the Hundred of Hemlingsford, tried at Warwick assizes, before Lord Chief Baron Eyer, April 5, 1792*, 1793.
 45. Hobson, Rev. John, *Remarks on Croft's sermon-, 'The test laws defended'*, 1790.
 46. Hutton, William, *An history of Birmingham*, 3rd edition, with considerable additions, and new engravings of the public buildings, 1795.
 47. —With a new introduction by Christopher R. Erlington, Wakefield 1976.
 48. An Inhabitant of Birmingham, *An address to the inhabitants of Birmingham occasioned by very familiar letters addressed to Dr. Priestley*, 1790.
 49. (Jones, David,) *Strictures on a pamphlet, entitled : Thoughts on the late riot at Birmingham*. By a Welsh Freeholder, London 1791.
 50. (Jones, David,) *Thoughts on the riots at Birmingham*. By a Welsh Freeholder, Bath 1791.
 51. John Not Button Burnisher, see below 73.
 52. Kenrick, T., see below (3) 1 ; 77.

53. Madan, Rev. Spencer, *Claims of the dissenters considered*, 1790.
54. Matthews, A. B. (ed.), *The riots at Birmingham, July 1791*, 1863. See *An authentic account of the dreadful riots in Birmingham*...
55. A Member of the Birmingham Constitutional Society, *A letter to the English nation, where in the dreadful consequences of war are considered and exposed*, 1793.
56. A Member of the Church of England, but no Party Man, *The Retort courteous; or, remarks on a letter to Dr. Priestley, under the signature of John Churchman, in the Birmingham & Stafford Chronicle*, 1791.
57. Mercator, a Mechanic of Birmingham, *Familiar letters, on misanthropy; or, a call to the misguided: addressed to a father and brother*, 1794. (A reply to Rev. J. Edwards and Rev. E. Burn)
58. Miller, R. and Laugharne, H., *Remarks upon a letter to the printer of the Birmingham Gazette, dated October 14, 1791, and also upon a letter addressed to the inhabitants of Warwick, dated August 8, 1791*, Warwick (1791).
59. More, Hannah, *Village politics by Will Chip*, 1793.
60. Morfitt, John, *Poems*, see Pickering below 75 and Langford below (3) 1; 80.
61. Noboddy, Nicholas, *A wurd or 2 of good counsil to abowt hafe a duzzen diffrunt sorts o fokes*, [sic] 179(?)
62. Nott, Job, *Another pennyworth of advice from old Job Nott, the buckle-maker*, 1797.
63. — *Birmingham Assizes, account of the great trial (of button-manufacturers, for making gilt buttons deficient in gold) in a letter to my cousin John Nott*, c. 1800.
64. — *Birmingham in danger! Of which Job Nott gives fair warning*, 1799.
65. — *England in danger! And Britons asleep*, 1798.
66. — *Further humble advice from Job Nott*, 1800.
67. — *Job Nott's humble advice, with a suitable postscript*, 1792.

68. ———*The life and adventures of Job Nott, buckle-maker, of Birmingham, as written by himself*, 1793.
69. ———*More advice from Job Nott, the Birmingham buckle-maker*, 1795.
70. ———*An appeal to the inhabitants of Birmingham: designed as an answer to Job Nott, buckle-maker*, 1792.
71. ———*A word to the wise: or, John Nott's (the original John Nott's) opinion of the riot in Snow Hill and of and about the handbill, etc.*, 1795.
72. ———*Very familiar letters addressed to Dr. Priestley, in answer to his familiar letters to the inhabitants of Birmingham*, 1790.
73. Not [sic], John, see below (3) 1; 74.
74. Nott, Tobias, *Toby Nott's defence of himself and the family of Notts, in answer to Mr. Geo. Edmonds's Weakly* [sic] *Register of Saturday, 9th October, 1819*, 1819.
75. Pickering, Mrs., *Poems, to which are added poetical sketches by the author, and translator of Philotoxi Ardenae (with poetical sketches by John Morfitt)*, n. d.
76. Pindar, Peter, junior, *The riots of Birmingham: or, Church and King! A poem*, 1791.
77. (Posters relating to the riots, 1791, held by BRL.)
78. A Publican, no Republican, *Original songs adapted to familiar tunes, upon constitutional subjects, wherein notice is taken of the NATIOAL CONVENTION OF FRANCE, THE MAJESTY OF THE PEOPLE, TOM PAINE'S VISION, THE MURDER OF LOUIS XVI & etc., with an introductory address to Job Not*, 1793.
79. Priestley, Rev. Dr. Joseph, *An appeal to the public on the subject of the riots in Birmingham*, (Part I) 1791, (Part II) 1792.
80. ———2nd ed., with appendix, 1792.
81. ———3rd (?) ed., with appendix and addenda, 1792.

82. —In Priestley, *Theological and miscellaneous works*, Vol. 19, 1831.
83. —*The duty of forgiveness of injuries : a discourse intended to be delivered soon after the riots in Birmingham*, 1791.
84. —In Priestley, *Theological and miscellaneous works*, Vol. 15, 1831.
85. —*Extracts from Dr. Priestley's works, read in court at the last Warwick Assizes*, 1792. (at the trials of the Birmingham rioters)
86. —*Familiar letters addressed to the inhabitants of Birmingham*, 1790.
87. —*Joseph Priestley returns blessings for curses in a letter to his neighbours of Birmingham (July 19, 1791)*, in Schuster, M. L. (ed), *A treasury of the world's greatest letters*, Studies of the Warburg Institute, Vol. 13, 1941.
88. —*Letter to the inhabitants of Birmingham (July 19, 1791): Mr. Keir's vindication of the Revolution dinner : and Mr. Russell's account of the proceedings relating to it, etc.*, 1791.
89. —Another ed., see below S. Timmoms.
90. —*Letters to the members of the New Jerusalem Church, formed by Baron Swedenborg*, 1791.
91. —*Letters to the Rev. Edward Burn*, 1790.
92. —*The present state of Europe compared with antient prophecies ; a sermon, preached at the Gravel Pit Meeting in Hackney, February 28, 1794*... *With a preface, containing the reasons for the author's leaving England*, London 1794.
93. *Report of the trials of the rioters, at the Assizes held at Warwick, August 20, 1791*, taken in short-hand by Marsom & Ramsey. By order of the Committee of Protestant Dissenters in Birmingham. (1791)
94. Scholefield, Radcliffe, *Love to enemies explained and recommended, in a discourse, delivered to the two societies of the Old and New Meetings in Birmingham, lately burnt down ; now assembling together at Carr's-lane Meetinghouse, August 7, 1791*, (Birmingham) 1791.
95. Scott, J., *A Letter to the Rev. R. Foley, in answer to the charges brought against the dissenters in Stourbridge : with a con-*

cise view of the principles of dissenters, by B. Carpenter, to which is added, an account of the proceedings at the Lye-Waste, Stourbridge (1792).

96. The society of protestant dissenters, *The memorial and petition of the Society of protestant dissenters, assembling at Kingswood Chapel, (commonly called Dolles's Chapel) in the Parish of King's-Norton, and County of Worcester, Kingswood 1793.* see above A 14.
97. *The Trials of John Binns, deputy of the London Corresponding Society, for sedition, 1797.*
98. Warwickshire Photographic Survey, *Birmingham riots, 1791. Photographs of engravings, etc., 1906.*
99. A Welsh Freeholder, see Jones, David above 49, 50.

(3) Other Printed Works

1. Books

1. *Act for the more easy raising money upon the Hundred of Hemlingford, for paying the damages and costs incurred on account of the late riots within the said Hundred, than is authorized to be done by the laws now in being (33 Geo. III., c. 39), 1793.*
2. Adderley, the Hon. H. A., *History of the Warwickshire Yeomanry Cavalry, Wawrick 1912.*
3. (Addington, Stephen.) *A touch on the Birmingham riot, Dr. Add-ing-tone's wig burnt in the flames of Dr. Priesthood's brick-kiln: in a dialogue between Mr. Christian a Churchman, and Mr. Socinian a Presbyterian; on hearing a funeral sermon, preached by Dr. Add-ing-tone, ...also, a sermon, on Dr. Add-ing-tone's bull, written by Richard Lovett, etc, London (1791).*
4. A. E. N., *An inhabitant and A constitutionalist, to the printer of the diary, 1791.*
5. —Another ed., see S. Timmons below 125.
6. Allen, G. C., *The Industrial development of Birmingham and the Black Country, London 1927.*

7. Anon., *Appendix to the account of the Birmingham riots*, 1792.
8. Anon., *An authentic account of the dreadful riots in Birmingham, occasioned by the celebration of the French revolution, containing extracts from letters, Dr. Priestley's letter to the inhabitants of Birmingham; the hand bill signed (by) Lord Aylesford, etc.; the inflammatory hand bill; and a letter from W. Russell*, London 1791.
9. — (Another edn.) in A. B. Matthews (ed.), *The riots at Birmingham, July 1791*, 1863. See above (B) (2) 54.
10. Anon., *Curtius*...see Cumberland, Richard below 47.
11. Anon., *Fortunate recovery of the canonized remains belonging to Miss Presbyterea Democracy; who suddenly fell an unwilling sacrifice to an unexpected stroke of the Grim King of Terrors, at dinner after the first course of a grand public festival given by her to the British discontented and dissenting in the town of Birmingham, on Thursday, the 14th of July, 1791, in honour of the French revolution, etc.*, (1791).
12. Anon., *High Church politics: being a seasonable appeal to the friends of the British constitution, against the practices and principles of High Churchmen; as exemplified in the late opposition to the repeal of the test laws, and in the riots at Birmingham*, London 1792.
13. Anon., *The late riots at Birmingham*. (Broadside.) 1791.
14. Anon., *A poem on the celebration of the French revolution in Birmingham*, 1791. (with a letter to the inhabitants, by J. Priestley, and list of toasts at the Revolution dinner)
15. Anon., *Sketches of popular tumults illustrative of the evils of social ignorance*, 1837. (including a chapter on the Birmingham riots of 1791)
16. Anon., *Thoughts on the late riot at Birmingham*, London 1791.
17. Arendt, Hannah, *On revolution*, London 1964.
18. Ashton, T. S., *Economic fluctuations in England, 1700-1800*, Oxford 1959.

19. Aspinall, A. (ed), *The correspondence of George, Prince of Wales 1770-1812*, Vol. II 1789-1794, London 1964.
20. Barnesm, D. G., *The history of the English corn laws*, London 1930.
21. Barnsby, George, *The Dudley working class movement, 1750-1832*, Dudley Public Libraries Transcript No. 7, 1964.
22. Beale, Catherine Hutton, *Memorials of the Old Meeting House and Burial Ground, Birmingham*, copied, collected, and illustrated by Catherine Hutton Beale, Birmingham 1882.
23. Beloff, Max, *Public order and popular disturbances*, Oxford 1938.
24. Belsham, Thomas, *The right and duty of unitarian christians to form separate societies for religious worship. A sermon preached July 22, 1802, at the opening of the New Meetinghouse at Birmingham, erected in the room of that in which Dr. Priestley formerly officiated, and which was destroyed in the riots, July 14, 1791*, London 1802.
25. Binns, John, *Recollections of the life of John Binns : twenty-nine years in Europe and fifty-three in the United States*, Philadelphia 1854.
26. Black, E. C., *The association ; extraparlimentary political organisation, 1769-93*, Harvard 1963.
27. *Blackie's Comprehensive history of England*, Vol. 6, 1895.
29. Bohstedt, John, *Riots and community politics in England and Wales 1790-1810*, Cambridge and London 1983.
30. Booker, Rev. Dr. Luke, see above (B) (2) 24.
31. Brown, P. A., *The French revolution in English history*, London 1918.
32. Burke, Edmund, *Reflections on the revolution in France*, London 1791.
33. *Centenary of the Priestley riots, 1791-1891*. 1891. (Letter, ticket, menu, etc. relating to centenary dinner held at Great Western Hotel, 14th July 1891.)
34. Chatterton, Stephen., *Poems ; consisting of elegies, odes, and songs ; with various other pieces, political and humorous, satirical, and descriptive, To which are added, in prose, strictures on the late Birmingham riots*, 1795. (イロハ)

續部分のタイトルは The seven chapters of the first book of things, being concise and impartial account of the Birmingham riots, with a few necessary strictures, by Levi Ben Modercai)

34. Clark, E. F., *Truncheons: their romance and reality, with a sketch of Bow Street runners, Townsend and the origins of the police*, 1935.
35. Clayton, J., *The duty of Christians to magistrates: a sermon occasioned by the late riots at Birmingham, preached at King's Weigh-house ... July 24, 1791, with a prefixed address to the publick, intended to remove the reproach, lately fallen on protestant dissenters*, London (1791).
36. Cobbett, W., *Observations on the emigration of Dr. Joseph Priestley and on the several addresses delivered to him on his arrival at New York, etc.*, Philadelphia 1794.
37. — (with additions) The fourth edition, Philadelphia 1796.
38. — *Remarks on the explanaton by Dr. Priestley, respecting the intercepted letters of J. H. Stone (with an introductory letter to the people of Birmingham) by Peter Porcupine*, 1799.
39. — see also Cole, G. D. H., below.
40. Cole, G. D. H. (ed.), *Letters from William Cobbett to Edward Thornton, written in the years 1797 to 1800*, Oxford 1937.
41. Coleridge, S. T., *Sonnets on eminent characters, contributed to the Morning Chronicle in December 1794 and January 1795*, in *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*, vol. VII, reproduced from the first edition of 1863, Kyoto 1989.
42. — *Religious musings, a desolatory poem, written on the Christmas eve of 1794*, II, 371-376, in the above *Complete Works*, vol. VII.
43. A Collection of magazine articles, etc., relating to Dr. Joseph Priestley, and the Birmingham riots of 1791, etc., 1767-1879, held by the Birmingham Public Library.

44. Cooper, Thomas, *A reply to Mr. Burke's invective against Mr. Cooper, and Mr. Watt, in the House of Commons, on the 30th of April, 1792*, London 1792.
45. —See also Malone, Dumas and Stephens, A., below.
46. Crosland, Mrs. N., *Landmarks of a literary life*, 1893. (including some remarks on the Birmingham riots of 1791)
47. (Cumberland, Richard,) *Curtius rescued from the Gulph; or, the retort courteous to the Rev. Dr. Parr, in answer to his learned pamphlet, intituled, "A sequel," & c*, London 1792.
48. Davies, V. L., and Hyde, H., *Dudley and the Black Country 1760-1860*, Dudley Public Libraries Transcript No. 16, 1970.
49. Derry, Warren, *Dr. Parr, a portrait of the Whig Dr. Johnson*, Oxford 1966.
50. Dickinson, H. W., *Matthew Boulton*, Cambridge 1937.
51. Dixon, R. A. M., *Was Dr. Priestley responsible for the dinner which started the 1791 riots?* Unitarian Historical Society Transactions, Vol. 5, Part 3, 1933. (with reply by B. M. Allen, (and) the rejoinder by R. A. M. Dixon)
52. Disney, John, *A sermon preached in the unitarian chapel, in Essex Street, London, Sunday, April XV, MDCCCIV, on occasion of the death of the Rev. Joseph Priestley, who died at Northumberland in Pennsylvania, North America, February VI, MDCCCIV, published at particular request*, 2nd ed., London 1804.
53. —*Sermons*, in three volumes, London 1793.
54. Dudley, T. B. (ed.), *Memoir of James Bisset (written by himself), of Perth, Birmingham, and Leamington: author, royal medalist, poet, and inventor; with portrait, numerous illustrations, and a collection of his songs, &c*, Leamington Spa, 1904.
55. Ehrman, John, *The younger Pitt; the years of acclaim*, London 1969.
56. Field, William, *Memoirs of the life, writings and opinions of the Rev. Samuel Parr. LLD.; with biographical notices of*

- many of his friends, pupils, and contemporaries, London 1828.
57. —see above (2) 35.
58. Foley, R., *A letter to Dr. Priestley in answer to the appendix (No. 19) of his "Appeal to the public, on the subject of the riots in Birmingham, Part II, with a sermon"*, 1793.
59. Gill, Conrad, *History of Birmingham*, Volume one: Manor and Borough to 1865, Oxford 1952.
60. Goodwin, Albert, *The friends of liberty; the English democratic movement in the age of the French revolution*, London 1979.
61. Hall, Robert, *The (entire) works of the Rev. Robert Hall, with a brief memoirs of his life, and a critical estimate of his character and writings*, 6 vols, London 1831-32.
62. Hankin, Christina C. (ed.). *Life of Mary Anne Schimmelpennink*, in two volumes, London 1858.
63. Hay, Douglas, Linebaugh, Peter, and Thompson, E. P., *Albion's fatal tree; crime and society in eighteenth century England*, London 1975.
64. Hazlitt, W., *Letter to the Shrewsbury Chronicle (occasioned by the Birmingham riots and signed ΕΛΙΑΣΟΝ)*, in Hazlitt, W. C., *Memoirs of W. Hazlitt*, vol. 1, 1867.
65. Hill, Frederick, *An autobiography of fifty years in times of reform*, edited, with additions, by his daughter Constance Hill, London 1894.
66. Holt, Anne, *A life of Joseph Priestley*, London 1931.
67. Hutton, Catherine, *A narrative of the riots in Birmingham, July 1791*, 1875.
68. —*Reminiscences of a gentlewoman of the last century: letters of Chatherine Hutton, daughter of William Hutton*... ed. by C. H. Beale, Birmingham 1891.
69. Hutton, William, *The life of William Hutton*, London 1816.

70. Inglis, Brian, *Poverty and the industrial revolution*, Panther edn., London 1972.
71. Jewitt, Llewellynn (ed.), *The life of William Hutton and the history of the Hutton family*, London 1873.
72. ——— *The Wedgewoods : being a life of Josiah Wedgewood ; with notices of his works and their productions, memoirs of the Wedgewood and other families, and a history of the early potteries of Staffordshire*, London 1865.
73. Jeyes, S. H., *The Russells of Birmingham in the French revolution and in America, 1791-1814*, 1911. (including “A personal history of the Birmingham riots”, by Martha Russell, etc)
74. John Not Button Burnisher, *Letter of advice to the Rev. J. Edwards ; with remarks on his ‘Letter to his nation, etc., occasioned by (E. Burn’s) ‘Reply to Dr. Priestley’s Appeal to the public, on the riots in Birmingham,’ 1792.*
75. Johnstone, C. J., *History of the Johnstones, 1191-1909*, 1909. (containing references to Birmingham, the riots, etc.)
76. (Jones. W..) *A small whole-length of Dr. Priestley, from his printed works : …with an analysis and an appendix of extracts from the writings of Dr. Priestley, which were read in court at the Assizes at Warwick*, London 1792.
77. Kenrick, T., *The spirit of persecutors exemplified : and the conduct to be observed towards their descendants, a sermon delivered at George’s Meeting-house, Exeter, November 5th, 1791, to which are prefixed, observations upon the causes of the late riots at Birmingham*, Exeter 1791.
78. Laicus, *Letter to a layman on his remarks on the Rev. Edward Burn*, 1819.
79. Lamb, Charles, *Letters to Samuel Taylor Coleridge, May 27, 1796 ; January 2, 1797 ; January 10, 1797*, in *The Collected Works and Letters of Charles Lamb*.
80. Langford, John Alfred, *A century of Birmingham life : or, a chronicle of local events, from 1741 to 1841*, in two volumes, Birmingham 1868.
81. Langford, J. A., Mackintosh, C. S., and Tildesley, J. C., *Staffordshire and Warwickshire Past and Present*, Birmingham 1882.

82. A Layman, *An answer to Dr. Priestley's letters to the Right Hon. Edmund Burke*, London 1791.
83. Lincoln, A. H., *Some political & social ideas of English dissent, 1763-1800*, Cambridge 1938.
84. Loewenfeld, K., *Contributions to the history of science, based on autograph documents. From Memoirs. etc., of the Manchester literary and philosophical society, 1912-3, 1913.*
85. Lovett, Richard, see Addington, Stephen above.
86. Maccoby, S., *English radicalism*, 6 volumes, London 1935-61.
87. Mckendrick, Neil (ed.), *Studies in English thought and society in honour of J. H. Plumb*, London 1974.
88. McLachlan, H. J., *The unitarian movement in the religious life of England*, London 1934.
89. ——— *Warrington Academy, its history and influence*, Manchester 1943. (with references to Joseph Priestley and the Birmingham riots, and bibliographical notes, Chetham Society, New Series, vol. 107)
90. Magazine articles etc. relating to Joseph Priestley, held by BRL.
91. Malden, H. E., *Immediate consequences of the French revolution*, in Cassell's history of the British people, by E. A. Baker and others, Vol. 5, 1925. (with a reference to the riots in Birmingham)
92. Malone, Dumas, *The public life of Thomas Cooper, 1783-1839*, Yale Historical Publications Miscellany XVI, New Haven 1926.
93. Modecai, Levi Ben, see Chatterton, Stephen above.
94. Moir, Esther, *The justice of the peace*, London 1969.
95. Money, John, *Experience and identity, Birmingham and the West Midlands 1760-1800*, Manchester 1977.
96. (Newspaper cuttings on the centenary of the Birmingham riots of 1791, in Birmingham scrap book, Vol. I. BRL)
97. (Newspaper cuttings relating to Joseph Priestley and the Birmingham riots, 1791, in Birmingham Religious Scrap Book, collected by G. H. Osborne. fol. 1865-1900. BRL)

98. (Newspaper cuttings, etc., relating to Joseph Priestley, and the riots at Birmingham, 1791, fol. 1784, etc. BRL)
99. Owen, David E., *English philanthropy, 1660-1960*, Harvard U. P., 1964
100. Parr, Samuel, *Letter from Irenop(o)lis to the inhabitants of Eleutheropolis ; or, a serious address to the dissenters of Birmingham*, By a Member of the Established Chrch, 1792.
101. — *Memoirs*, see Field, William above.
102. — *A sequel to the printed paper lately circulated in Warwickshire by the Rev. Charles Curtis, brother of Alderman Curtis, a Birmingham rector, & c.*, London 1792.
103. Peck, T. Whitmore and Wilkinson, K. Douglas, *William Withering of Birmingham*, Bristol and London 1950.
104. Priestley, Rev. Dr. Joseph, *Memoirs of The Rev, Joseph Priestley...to the year 1795, written by himself.....*, London 1806.
105. Romilly, Samuel, *Memoirs of the life of Sir Samuel Romilly, written by himself ; with a selection from his correspondence*, in three volumes, London 1840.
106. Rose, J. Holland, *William Pitt and the great war*, London 1911.
107. Rowlands, Marie B., *Masters and men in the West Midlands hardware trades before the industrial revolution*, Manchester 1975.
108. Royle, Edward, *Radical politics 1790-1900 ; religion and unbelief*, London 1971.
109. Rude, George, *The crowd in history, 1730-1848*, New York 1964. (トビウツク語)
110. (Russell, Miss Martha.) *Journal relating to the Birmingham riots, by a young lady of one of the persecuted families*, 1872. (Fifty copies only reprinted from the Christian Reformer, May 1835, for private circulation, in February , 1872, with additions in brackets [], BRL ㊦出題)
111. Russell, William, see Anon, *Addresses* in (2) and Jeyes, S. H. above.

112. Schimmelpennink, Mary Anne, see Hankin above.
113. Schofield, Robert E., *The lunar society of Birmingham*, Oxford 1963.
114. Shaw, Rev. Stebbing, *The history and antiquities of Staffordshire*, London 1798.
115. Shelton, Walter J., *English hunger and industrial disorders. A study of social conflict during the first decade of George III's reign*, London 1973.
116. Simon, B., *Studies in the history of education, 1780-1870*, London 1960.
117. Smith, Alan, *The established church and popular religion, 1750-1850*, London 1971.
118. Smith, William Hawkes, *Birmingham and its vicinity, as a manufacturing & commercial district*, London and Birmingham 1836.
119. Sobersides, Timothy, *Letter to Jonathan Blast, bellows-maker, at Birmingham*, 1792.
120. Stephens, A., *Memoirs of Thomas Cooper*, London 1900.
121. Stevenson, John, and Quinault, Roland (ed.), *Popular protest and public order*, London 1974.
122. Thompson, E. P., *The making of the English working class*, London 1963.
123. Ticklehim, Timothy, *Something from somebody: or, the turnout sentiments of a Rev. Divine, and an irreverend buckle-maker compared*, 1791.
124. ("Times".) The traditional policy of the "Times", Manchester 1791. (extracts from The Times, 1791; and letters by W. Russell, J. Keir and J. Priestley, relating to the riots at Birmingham, 1791)
125. Timmons, S., *A collection of caricatures, broadsides, letters, newspaper cuttings, portraits, etc., of, or relating to Dr. Joseph Priestley*, fol. (1774, etc.) BRL.
126. Turner, Thomas, *The history of the Old Ship Inn, Camp Hill: Prince Rupert's Headquarters, 1643. With some remarks on the Prince, Oliver Cromwell, and the Civil War, and an interesting account of Bordesley, & c.*, Birmingham

(1863).

127. Trevelyan, G. M., *Lord Grey of the Reform Bill, being the life of Charles, Second Earl Grey*, London 1920.
128. Veitch, G. S., *The Genesis of parliamentary reform*, London 1913.
129. *Victoria County History of Staffordshire* I, reprinted edition, London 1968.
130. *Victoria County History of Warwickshire* II, IV and VII, reprinted edition, London 1964-71.
131. Ward, W. R., *Religion and society, 1790-1850*, London 1972.
132. Wardroper, John, *Kings, Lords and wicked libellers ; satire and protest, 1760-1837*, London 1973.
133. Wearmouth, R. F., *Methodism and the common people of the eighteenth century*, London 1945.
134. Webb, R. K., *The British working class reader, 1790-1848*, London 1955.
135. Webster, P. C. G., *Notes, genealogical, historic & heraldic, relating to the Websters of Flamborough*, London & Warwickshire, printed for private circulation by his wife, F (rances) H. W (ebster), Leamington 1880.
136. Wells, R., *Correspondence between the Rev. Robert Wells and a gentleman under the signature of Publicola, relative to the riots at Birmingham, and the commemoration of the French revolution*, London (1791).
137. A Welsh Freeholder, see Jones, David, above (2).
138. —See Peck and Wilkinson above.
139. Williams, Gwyn A., *Artisans and sans-cullotes*, London 1968.
140. Withering, William, *The miscellaneous tracts of the late William Withering...To which is prefixed A memoir of his life, character, and writings*, in two volumes, London 1822.
141. Witton, P. H. and Edwards, J., *View of the ruins of the principal houses destroyed during the riots at Birmingham, drawings by P. H. Witton, with text in English and French by the artist and J. Edwards*, (Birmingham) 1791.
142. —Another ed., in Matthews, A. B. (ed), *The riots at Birmingham, July 1791*, 1863.

143. Wreford, The Rev. John Reynell, *Sketch of the history of Presbyterian Nonconformity in Birmingham*, Birmingham 1832.
144. Young, Arthur, *An enquiry into the state of the public mind amongst the lower classes: and on the means of turning it to the welfare of the state. In a letter to William Wilberforce, Esq...*, London 1798.

2. Articles

1. Allen, B. M., Priestley and the Birmingham riots, *Unitarian Historical Society Transaction*, Vol. 5, Part 2, 1932.
2. Allen, B. M., Reply (to R. A. M. Dixon's article "Was Dr. Priestley responsible for the dinner which started the 1791 riots?"), *Unitarian Historical Society Transactions*, Vol. 5, Part 3, 1933.
3. Anon., Centenary of the Priestley riots, *The Inquirer*, July 25, 1891.
4. Belloc, Bessie Rayner, Joseph Priestley in domestic life, *The Contemporary Review*, vol. LXVI, July-December, 1894.
5. Chaloner, W. H., Dr. Joseph Priestley, John Wilkinson, and the French revolution, 1789-1802, *Transactions of the Royal Historical Society*, fifth series, vol. 8, London 1958.
6. Chatwin, P. B., Edgbaston, *Transactions of the Birmingham Archiological Society*, 1913.
7. Gill, Conrad, Birmingham under the street commissioners 1769-1851, *University of Birmingham Historical Journal*, I (1948), 255-287.
8. Ginter, Donald E., The loyalist association movement of 1792-3 and British public opinion, *Historical Journal*, IX (1966), 179-190.
9. Graham, Jenny, Revolutionary philosopher: the political ideas of Joseph Priestley (1733-1804), part I, *Enlightenment and dissent*, No. 8, 1989; part II, No. 9, 1990.
10. Granger, C. W. J., and Elliott C. M., A fresh look at wheat prices and markets in the eighteenth century, *Economic History Review*, second series XX, no. 2 (1967), 257-265.

11. Hughes, W. I., The Priestley riots of 1791, *The History Teachers, Miscellany*, Vol. 3, 1925.
12. Maddison, R. E. W. and Maddison, F. R., Joseph Priestley and the Birmingham riots, *Notes and Records of the Royal Society of London*, Vol. 12, No. 1, August 1956.
13. Mitchell, Austin, The association movement of 1792-3, *Historical Journal*, IV (1961), 56-77.
14. Norris, J. M., Samuel Garbett and the early development of industrial lobbying in Great Britain, *Economic History Review*, second series x, no. 3, (1957-8), 450-460.
15. Pelham, R. A., Corn milling and the industrial revolution in England in the eighteenth century, *Birmingham Historical Journal*, vi (1957-58), 161-175.
16. Robinson, Eric, New Light on the Priestley riots, *Historical Journal*, iii (1960), 73-75.
17. —An English Jacobin ; James Watt, junior, 1769-1848, *Cambridge Historical Journal*, xi (1953-4), 349-355.
18. —see *University of Birmingham Historical Journal*, vol. XI, No. 1, 1967 below.
19. Rogers, Showell, Dr. Parr of Haffan (1797-1825), *Birmingham and Midland Institute of Archaeological Society Transactions 1898*, 1899.
20. Rose, R. B., The Priestley riots of 1791, *Past and Present*, no. 18 (1960), 68-88.
21. Sheps, Arthur, Public perception of Joseph Priestley, the Birmingham dissenters, and the Church-and-King riots of 1791, *Eighteenth Century Life*, Vol. 13, No. 2, May 1989.
22. Skinner, Quintin, Meaning and understanding in the history of ideas, *History and Theory*, viii (1969), 3-53.
23. Thompson, E. P., The moral economy of the English crowd in the eighteenth century, *Past and Present*, no. 50 (1971), 76-136.
24. Thompson, E. P., Patrician society, plebeian culture, *Journal of Social History*, (1974), 382-405.
25. *University of Birmingham Historical Journal*, vol. XI, No. 1, 1967, The Lunar Society of Birmingham.

26. Western, J. R., The volunteer as an antirevolutionary force 1793-1801, *English Historical Review*, lxxi (1956), 603-614.

27. Wise, M. J., The influence of the Lunar Society in the development of Birmingham, *University of Birmingham Historical Journal*, xi (1967), 79-93.

(C) Unpublished Dissertations

1. Money, John, Public opinion in the West Midlands, 1760-93, Cambridge (1969).

2. Smith, Martin, Conflict and society in the late eighteenth century Birmingham, Cambridge (1977).

3. Smith, Martin John, English radical newspapers in the French revolutionary era, 1790-1803, Royal Holloway College, University of London (1979).

(D) 邦語文献

1. 杉山忠平 『理性と革命の時代に生きて』岩波新書、一九七四年。

2. 杉山忠平 「理性と革命——プリーストリとパーミンガム事件」『思想』一九六三年七月。

3. 杉山忠平 「プリーストリとスミス——十八世紀思想史の一局面——」『思想』一九七九年一月。

4. 杉山忠平 「パーミンガム暴動の余波」『法経研究』二七卷三号（一九七九年二月）

5. 杉山忠平 「ウィリアム・コベットのプリーストリ批判」『一橋論叢』八六卷三号（一九八一年九月）

6. 三宅泰雄 『空気の発見』角川文庫、一九六二年。